矢駄アカメ・イケダ遺跡

県営ほ場整備事業矢駄地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成基盤整備事業）矢駄地区に係る矢駄アカメ・イケダ遺跡発掘調査報告書である。調査地は、石川県羽咋郡志賀町矢駄地内に所在する。

2　調査は、石川県農林水産部農地整備課、羽咋農林総合事務所の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。費用は同課が負担した他、一部文化庁の補助金による。

3　発掘調査は平成７年５月１日から同年６月９日まで、中島俊一（石川県立埋蔵文化財センター調査第一課長）の指導を受け、土屋宣雄（同主事、現在(社)石川県埋蔵文化財保存協会)、小阪　大(同嘱託、現在鶴来町教育委員会）が担当して行った。また、大藤雅男（同センター　調査補助員）が調査を補助した。発掘調査面積は矢駄アカメ遺跡が200㎡、矢駄イケダ遺跡が30㎡である。

4　出土品整理は平成８年度に、記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図のトレースについて(社)石川県埋蔵文化財保存協会に業務委託して実施した。

5　本書の執筆は第５章を中島が、その他を土屋が分担して行い、写真図版作成・編集は中島が行った。

6　本書で用いた方位は磁北を示し、標高は海抜高（m）である。

7　本調査による出土品、記録資料などは石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管・管理している。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査の経過 …… 5

第３章　矢駄イケダ遺跡の調査 …… 7

1. 遺跡の立地　2. 調査区　3. 土層　4. まとめ

第４章　矢駄アカメ遺跡調査概要 …… 8

1. 遺跡の立地　2. 調査区　3. 土層　4. 遺構

第５章　出土遺物 …… 16

1. はじめに　2. 遺物群のなかみについて　3. 土師器の形の違いを中心に　4. その他

第６章　まとめ …… 31

報告書抄録

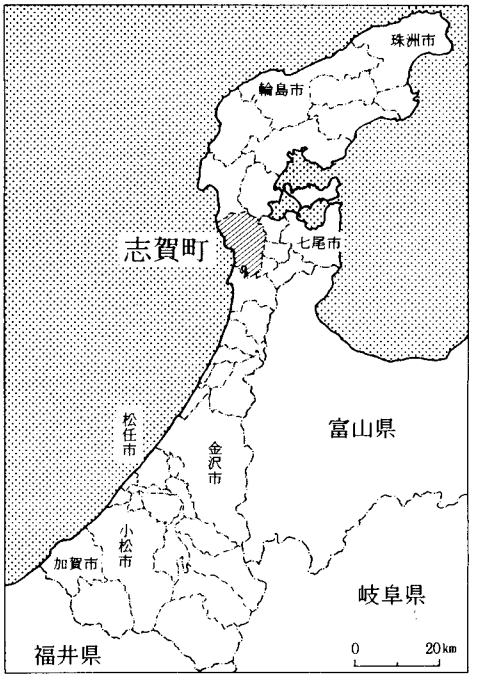
ふりがな	やだあかめ・いけだいせき
書名	矢駄アカメ・イケダ遺跡
副書名	県営ほ場整備事業矢駄地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中島俊一、土屋宣雄
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921-8044　石川県金沢市米泉町4丁目133番地　TEL 076-243-7692
発行年月日	西暦1998年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
矢駄アカメ (やだあかめ)	石川県羽咋郡 (いしかわけんはくいぐん) 志賀町矢駄 (しかまちやだ)	17384		36度 59分 20秒	136度 49分 15秒	1995.5.1 ～ 1995.6.9	200	県営ほ場 整備事業
矢駄イケダ (やだいけだ)	石川県羽咋郡 (いしかわけんはくいぐん) 志賀町矢駄 (しかまちやだ)	17384		36度 59分 15秒	136度 49分 10秒	1995.5.1 ～ 1995.6.9	30	県営ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢駄アカメ	集落跡	縄文・平安	堀立柱建物5棟 土坑11基 溝3条	縄文土器、土師器 須恵器、中世土師器 陶磁器、土錐、鉄器	中世土師器の良好な出土が認められた。
矢駄イケダ	集落跡	不詳		土師器	集落の縁辺部を確認した。

第1章　位置と環境

矢駄アカメ・イケダ遺跡は石川県羽咋郡志賀町矢駄地内に所在する。志賀町は能登半島の中央部の西海岸に位置し、町域の西部は日本海に面し緩やかに屈曲して入江をなし、南部から東部にかけては、眉丈山系に連なる低丘陵地帯で、南部が雨宮丘陵・東部が加茂丘陵とされ、北部は志賀浦台地が面する。これら丘陵に囲まれる形で旧福野潟低湿地帯が南域に広がり平野部を形成している。この平野部を形成した河川は、北東の富来町奥刈越峠を源とし西流する米町川と、南東の眉丈山系の後山を源とし平野部を北西流する於古川が、神代で合流し、神代川となって日本海に注ぐ。また、旧福野潟は、かつて南北約4Km、東西約2Km、周囲10Km以上の広がりをもっていたようで、その汀線をとりまくように、鹿首・矢駄・二所宮・福野・堀松・神代と集落が点在する。その形成は縄文時代早期末から前期のいわゆる縄文海進時によるもので、以後の砂丘の形成により次第に入江がふさがれ、中近世までは潟湖であったものとされ、河川の堆積作用や江戸期よりみられる干拓により陸化していった。



第1図　志賀町位置図

矢駄アカメ遺跡は於古川の支流安津見川の谷に臨んだ東側眉丈山系の加茂丘陵から延びる舌状台地先端部の標高13m程度に立地し、その南方約2Kmの舌状台地裾から旧福野潟低湿地にあたる標高5m前後にイケダ遺跡が立地する。

本遺跡の周辺遺跡は、旧福野潟低湿地帯を取り囲む丘陵や微高地に展開しており、遺跡密度の高い地域である[1]。

まず旧石器時代では外浦海岸に面する赤住遺跡群の赤住ナカノA遺跡[2]が著名で、縄文時代以降にも至る。当旧福野潟周辺の縄文時代では、志賀浦台地の南端に位置する川尻ナベンタカ遺跡が前期にあたり、以降中期には海退により入江になったこともあり遺跡の増加が認められ、大阪地区標高5～7mの丘陵上には中期前葉を中心に後・晩期に至る大坂遺跡(25)、潟の南岸の標高15m台地上には中期中葉後半から後葉に営まれた町指定史跡でもある長沢堂ケ谷内遺跡(9)が位置し、後期以降には米浜遺跡(32)や上棚遺跡(34)が展開する。また、堀松・神代・穴口(27)と県下でも有数の貝塚の存在を認める地域である。

続く弥生時代には縄文時代ほど遺跡の展開はみられないが、中期小松式土器の出土をみた福野前川遺跡(7)、中期から後期には安津見川を隔てた対岸の西に倉垣遺跡[3]が、東に鹿首モリガフチ遺跡[4](47)が位置し、両遺跡は互いに密接に関わりながら営われたものと思われ、二つの拠点的集落が存在した。

古墳時代では、大坂坊の上遺跡(24)・大坂古屋垣内遺跡(42)や米浜はげの下遺跡(31)、二所宮日詰遺跡(39)等集落が活動するなかで、潟を囲繞する丘陵上に古墳が造成され始める。特に於古川・安津見川流域では古墳が密集する地域である。北岸丘陵上には前～中期にあたる径10～14m程度の円墳14基以上よりなる大坂城ケ墓古墳群(45)、円墳4基以上から構成される大坂オバタケ古墳群(26)・穴口

古墳群(29)が存在し、潟を挟んで南岸丘陵上には円墳6基よりなる二所宮宮山古墳群(21)が認められる。この内3号墳は径30mを測り葺石をもつもので群を抜いており、当該期のこの流域の首長墳に位置付けられる。後期には北岸での古墳の築造は終息し、南岸において展開がみられ円墳3基以上よりなる下甘田極楽寺山古墳群(20)が築造される。また、6世紀末には安津見川上流域に径30mを誇る円墳の倉垣丸山古墳が出現した。これは有力首長層の存在を物語るものであり、また、古墳時代を通じて当流域が、他地域よりはるかに優位性をもった支配的地域形成を成したことが読みとれるものである。

古代律令期に入ると、本地域は当初越前国羽咋郡に属していたが、養老2年(718)には能登国が立国[5]され編入されていった。また、能登国は天平13年(714)に至っては越中国に併合[6]され、さらに天平勝宝9年(757)再び能登国として立国[7]する。この様に三度の国遷を遂げるが、郡域に多少の流動があったにせよ本地域は一貫して羽咋郡に属していたことは確実のようである。その郡の下の郷については、10世紀の様相を伝える『和名類聚抄』のうち、志賀町に比定されるものは浅香年木氏の考察[8]によると、米町川・仏木川流域から志賀浦にわたる地区が都知郷に、本地域に当たる於古川・安津見川流域から大島海岸にかけての地区が、高家・岡本・神戸の三郷のうちの何れか一郷に当たるとしている。

また遺跡では、大坂地区において興味深い事例が認められる。米浜遺跡[9](32)にて6世紀から9世紀の製塩土器が出土したことと、時期は不確定(奈良時代か)ながら大坂舟の町遺跡(22)にて独木舟・櫂やウキが出土したことで、これにより当該時期には旧福野潟はまだ海水の流入する潟湖で、製塩や漁撈をおこなっていた様相がみられることである。

平安時代後半の11世紀中頃にかけて従来の郡郷が解体され、国衙によって院や保といった行政単位が編成されていった一方、貴族的大土地所有である荘園制度が始った。本地域は保延2年(1135)に賀茂別雷神社(京都上賀茂)の社領として立荘された土田荘の遺称地としての可能性が高い[10]。寿永3年(1184)[11]には「土田荘・桃浦」と確認でき、桃浦は現在の百浦に比定でき荘域の拡大がみられる。承久3年「能登国田数目録」[12]には「賀茂荘」と称される。応永2年(1395)紀銘の矢駄加茂神社所蔵仏像墨書銘には「土田賀茂荘」と認められ、安津見川河谷地域のみが、賀茂別雷神社領地として土田(賀茂)荘となり、残りの於古川流域などは収公されていったようである。

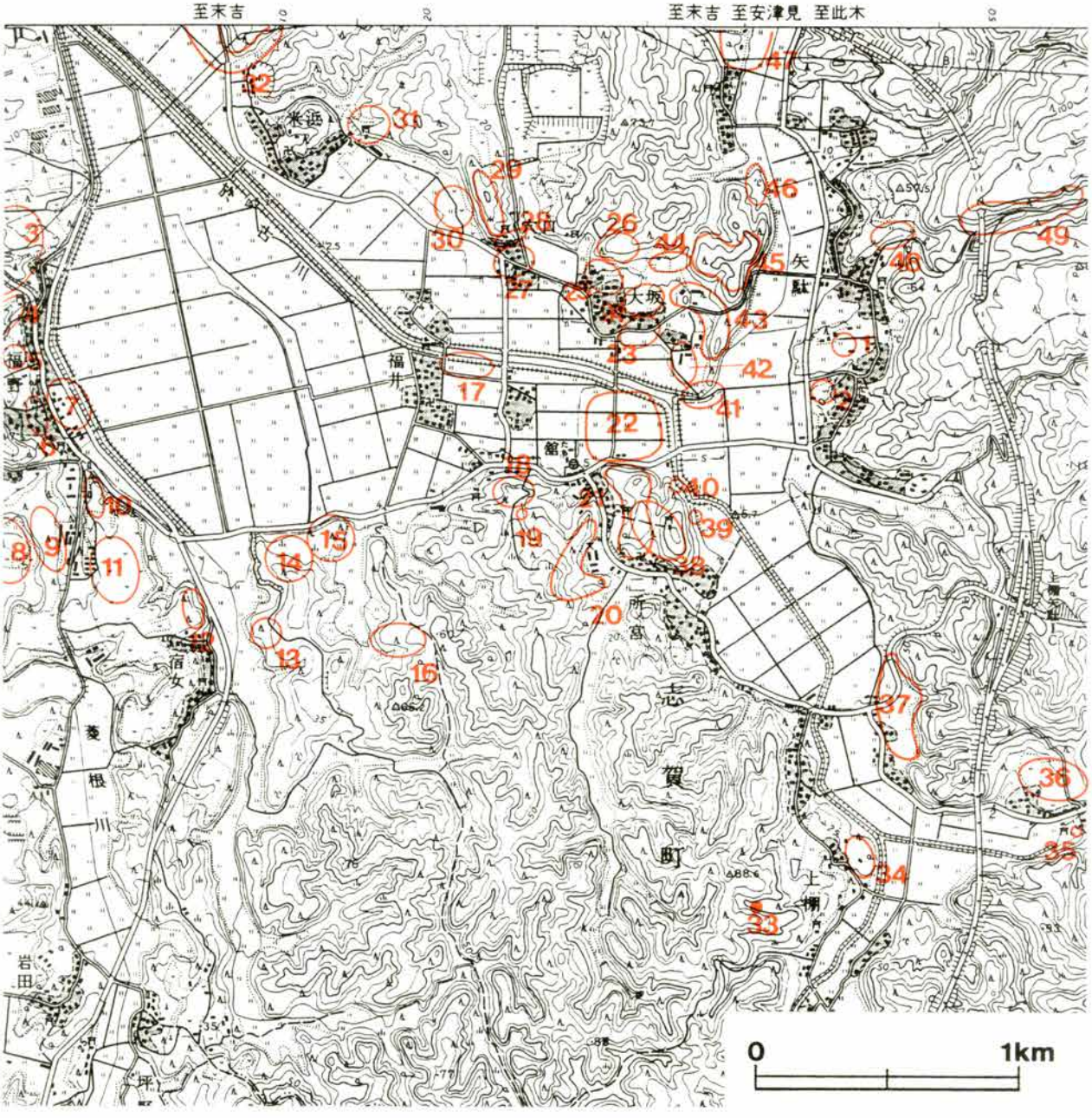
中世の遺跡としては大念寺遺跡(3)や福野経塚中世墳墓(10)、五輪塔を認める福井まんだら寺B遺跡(14)や、本遺跡北丘陵上には5基の横穴墓と思われる矢駄横穴状遺構[13](49)が存在する。また、調査時の周辺踏査により矢駄アカメ遺跡の東0.1Kmの現在墓地として利用され、地元では「クリバヤシ(元来クビバヤシと呼ばれていたものの訛化か)」と呼ばれている小隆起状地に五輪塔が散在しているのが確認されており、室町時代頃の中世墓地の可能性がもたれる。

注

(1) このため昭和29年には石川考古学研究会により、考古のみならず民俗を含めた広範囲な旧福野潟周辺の総合調査を行っている。石川考古学研究会編 1955 『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』 石川考古学研究会会誌第7号 石川考古学研究会
(2) 本田秀生 1990 「第4章 ナカノA遺跡の調査」『赤住遺跡群』本文 石川県志賀町教育委員会・赤住地区埋蔵文化財調査団
(3) 土肥富士夫他 1985 『倉垣遺跡』志賀町教育委員会
(4) 谷内尾晋司他 1984 『鹿首モリガフチ遺跡 能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター、石橋克美 1986 『鹿首モリガフチ遺跡 水田利用再編対策推進事業にかかる埋蔵文化財調査報告書』 志賀町教育委員会
(5)『続日本紀』 養老2年5月乙未条
(6)『続日本紀』 天平13年12月丙戌条
(7)『続日本紀』 天平勝宝9年正月乙卯条
(8) 浅香年木 1980 「第2章 古代」『志賀町史』第5巻沿革編 志賀町役場
(9) 米沢義光他 1980 『志賀町米浜遺跡 県営圃場整備事業関連埋蔵文化財調査報告書1』 石川県立埋蔵文化財センター
(10)「諸国賀茂社領付下鴨・諸賀茂社・諸家役系図」(賀茂別雷神社文書)(志賀町史編纂委員会 1947 『志賀町史』 資料編第1巻 志賀町役場)
(11)「源頼朝下文案」(賀茂別雷神社文書)(加能史料編纂委員会 1989 『加能史料』 平安Ⅳ 石川県)
(12) 承久3年9月6日「能登国四郡公田田数目録案」(加能史料編纂委員会 1992 『加能史料』 鎌倉Ⅰ 石川県)
(13) 橋本澄夫・中島俊一 1974 『志賀町矢駄遺跡 横穴状遺構の発掘 矢駄川通常砂防工事事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 石川県教育委員会

引用・参考文献

・若林喜三郎監修 1991 『石川県の地名』日本歴史地名大系第17巻 平凡社
・角川日本地名大辞典編纂委員会 1981 『角川 日本地名大辞典17 石川県』 角川書店



第２図　矢駄アカメ・イケダ遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝１／25,000）

遺跡番号	枝番号	名　称	所　在　地	所在地通称	種別	現　状	立　地	時　代	出　土　品	備　　考
1		矢駄アカメ遺跡	志賀町矢駄	アカメ	集落跡	田	台地	縄文･中世	縄文土器、土師器、須恵器、白磁、青磁、鉄器	1995年県埋文センター発掘調査
2		矢駄イケダ遺跡	志賀町矢駄	イケダ	散布地	田	低地	不詳	土師器	1995年県埋文センター発掘調査
3		大念寺跡	志賀町福野		寺院跡	畑・山林	丘陵	中世		
4		福野横穴群	志賀町福野		横穴墓	畑・山林	丘陵斜面	古墳	須恵器	
5		福野上野遺跡	志賀町福野		散布地	宅地	丘陵	不詳		
6		福野高野坂遺跡	志賀町福野	コウヤザカ	散布地	宅地	丘陵斜面	縄文～古墳	縄文土器、磨製石斧、石鏃、弥生土器、土師器	
7		福野前川遺跡	志賀町福野		散布地	河川・堤防	平地	弥生～中世	弥生土器、須恵器珠洲焼	

8		大島神主山遺跡	志賀町大島	カンヌシヤマ	散布地	畑	台地	古墳~平安	須恵器、土師器	
9		長沢堂ケ谷内遺跡	志賀町長沢	ドウガヤチ	散布地	畑・荒地・山林	台地	縄文	土器(中期)、磨製石斧、打製石斧	町指定史跡。
10		福野経塚中世墳墓	志賀町福野		経塚・墳墓	畑・山林	丘陵	中世	珠洲焼、古銭	
11		長沢おおくぼ遺跡	志賀町長沢	オオクボ	散布地	畑・荒地	台地	縄文	土器(中期)、磨製石斧、石鏃	
12		宿女遺跡	志賀町宿女		散布地	田	台地	不詳	土師器	
13		宿女南山遺跡	志賀町宿女南山		散布地	田・山林・畑	丘陵	弥生	土器	
14		福井まんだら寺B遺跡	志賀町福井	イヅカ	散布地	畑	丘陵	中世	五輪塔	
15		福井まんだら寺A遺跡	志賀町福井	イヅカ	散布地	畑	丘陵	縄文	土器(中期)、石鏃	
16		福井二塚古墳群	志賀町福井二塚		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳2基。
17		館泉田遺跡	志賀町館		散布地	田	平地	不詳		
18		館遺跡	志賀町館		散布地	畑	丘陵	不詳	土師器	
19		おお干場古墳	志賀町館	オオホシバ	古墳	畑	丘陵	古墳		円墳。戦時中の開田で墳丘削平。
20		下甘田極楽寺山古墳群	志賀町二別宮	極楽寺	古墳	山林	丘陵	古墳	土師器、須恵器、鉄矛、鉄鏃、鉄斧石器	円墳3基以上。1・2号墳は、1989年町教委発掘調査。過去に削平された1基に箱式石棺を有し、須恵器壺が出土したものあり。
21	1	二所宮宮山1号墳	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳(径23m)
	2	二所宮宮山2号墳	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳(径19m)
	3	二所宮宮山3号墳(車塚)	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳	埴輪	円墳(径30m高5.5m)周溝あり。
	4	二所宮宮山4号墳	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		墳丘削平。
	5	二所宮宮山5号墳(烏帽子塚)	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林・社地	丘陵	古墳		円墳(径10m、高2m)
	6	二所宮宮山6号墳(太刀塚)	志賀町二所宮	ミヤヤマ	古墳	山林・社地	丘陵	古墳		円墳(径5m、高1m)
22		大坂舟の町遺跡	志賀町大坂舟の町		散布地	田	平地	不詳	丸木舟、舟用具木製品	町指定史跡。
23		大坂坊の下遺跡	志賀町大坂坊の下		散布地	田	平地	不詳	土器	
24		大坂坊の上遺跡	志賀町大坂坊の上		散布地	田	台地	古墳	須恵器、土師器	
25		大坂遺跡	志賀町大坂		散布地	畑	丘陵	縄文中期	土器、石鏃、石錘玉、鳥骨、シジミ貝、磨製石斧	
26		大坂オバタケ古墳群	志賀町大坂	オバタケ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳4基以上(径10~14m)
27		穴口貝塚	志賀町穴口	ミヤノシタ	貝塚	宅地	平地	縄文中期	土器、シジミ貝石錘	
28		穴口宮の下遺跡	志賀町穴口		散布地	山林	丘陵	不詳	鉢	
29		穴口古墳群	志賀町穴口	ミヤ	古墳	社地・山林	丘陵	古墳	1号墳より須恵器	円墳4基(径10~14m)
30		米浜藤の森遺跡	志賀町米浜	フジノモリ	散布地	田	平地	平安	土師器、須恵器	
31		米浜はげの下遺跡	志賀町米浜	ハゲノシタ	散布地	荒地	丘陵	古墳	土師器、石錘	
32		米浜遺跡	志賀町米浜	フナツキバ	散布地	田・沼地	平地	縄文晩期	土器、石錘、軽石	
33		上棚火の塚古墳	志賀町上棚函屋	ヒノツカ	古墳	山林	丘陵斜面	古墳		円墳、横穴式石室。
34		上棚遺跡	志賀町上棚上野出	ノトカクチ	散布地	畑	台地	縄文~平安	縄文土器(晩期)、石鏃、石錘、磨製石斧、打製石斧、石匙、弥生土器、土師器、須恵器	
35		東谷内垣内遺跡	志賀町上棚東谷内		散布地	田	平地	縄文	磨製石斧	
36		東谷内サカンタカ遺跡	志賀町上棚東谷内	サカンタカ	散布地	畑	丘陵	縄文・平安	縄文土器(中期)、磨製石斧、石鏃、土師器、須恵器	1990年町教委発掘調査
37		上棚中村畑遺跡	志賀町上棚中村	ナカムラバタケ	散布地	田	平地	弥生・古墳	石鏃、玉	
38		二所宮宮山遺跡	志賀町二所宮		散布地	畑	丘陵	不詳	土師器	
39		二所宮日詰遺跡	志賀町二所宮	ヒヅメ	散布地	畑	平地	古墳	土師器、土錘	
40		二所宮日詰用水遺跡	志賀町二所宮	ヒヅメ	散布地	用水	平地	平安	須恵器(双耳瓶)	
41		大坂A遺跡	志賀町大坂		散布地	田・河川	平地	弥生	土器	
42		大坂古屋垣内遺跡	志賀町大坂古屋垣内		散布地	田	平地	古墳	土師器	
43		大坂やちだ遺跡	志賀町大坂	ヤチダ	散布地	畑	丘陵	古墳		
44		大坂寺畑遺跡	志賀町大坂寺畑		散布地	田・畑	台地	古墳	土師器	
45		大坂城ケ墓古墳群	志賀町大坂城ケ墓		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳14基以上(径16~18m)
46		鹿首遺跡	志賀町矢駄		散布地	田	丘陵斜面	不詳	土器	
47		鹿首モリガフチ遺跡	志賀町矢駄鹿首	モリガフチ	散布地	田・道路	台地	縄文~古墳	縄文土器、籃胎漆器、弥生土器、土師器、自然遺物	1980、85年県埋文センター、町教委発掘調査
48		矢駄瀬戸山遺跡	志賀町矢駄鹿首	セトヤマサカイ	散布地	田	丘陵	縄文	石斧	
49		矢駄横穴状遺跡	志賀町矢駄		墳墓	山林	丘陵斜面	中世	土師質土器皿、天目茶碗	5基あり。

第2章　調 査 の 経 過

矢駄アカメ・イケダ遺跡は、平成６年度に石川県農林水産部農地整備課（旧耕地整備課）が主管する県営ほ場整備事業（担い手育成基盤整備事業）矢駄地区の工事に先立ち実施された埋蔵文化財分布調査により発見された遺跡で、協議の結果、田面工事箇所は盛土等により遺跡に影響を及ぼさないようにし、遺跡が影響を受ける排水路敷設・農道工事部分についてのみ平成7年度に緊急発掘調査を実施することとなった。(第３図)

発掘調査は平成７年５月１日から同年６月９日の約１ケ月間、両遺跡を平行して実施した。

矢駄アケメ遺跡は排水路敷設・農道工事部分の幅２×総延長100ｍのトレンチで面積200㎡である。

矢駄イケダ遺跡は排水路敷設部分の幅２×総延長15ｍのトレンチで面積30㎡である。

調査日誌抄

５月１日（月）雨　　調査現場事務所設置

５月２日（火）雨　　発掘調査器材搬入

５月８日（月）晴　　【矢駄アカメ】重機による表土除去作業

５月９日（火）晴　　【矢駄アカメ】重機による表土除去作業。排水溝掘削・壁削り。Ａ－３・４区土師皿集中出土地区遺構精査、掘り下げ作業

【矢駄イケダ】重機による表土除去作業

５月10日（水）晴　　【矢駄アカメ】グリッド杭設定作業。Ａ－３・４区遺構検出作業。土師器集中出土地点実測・取上げ作業。

５月11日（木）晴　　【矢駄アカメ】Ａ－１区遺構検出・掘り下げ作業

【矢駄イケダ】トレンチ土層断面精査

５月16日（火）雨後曇【矢駄アカメ・イケダ】排水作業

５月17日（水）雨後曇【矢駄アカメ】Ａ－１区遺構掘り下げ作業

５月18日（木）晴　　【矢駄アカメ】Ａ－１・２区遺構検出・掘り下げ作業。Ａ－３・４区土師皿集中出土地点平面図作成、遺構掘り下げ作業

５月19日（金）晴　　【矢駄アカメ】Ａ－２・３区遺構検出・掘り下げ作業

５月23日（火）晴　　【矢駄アカメ】Ｂ区遺構検出・掘り下げ作業

５月24日（水）晴後曇【矢駄アカメ】Ａ－３・４区、Ｂ区遺構掘り下げ作業

５月25日（木）晴後曇【矢駄アカメ】Ａ－３・４区、Ｂ区遺構掘り下げ作業

５月26日（金）曇　　【矢駄アカメ】Ａ－２・３区１号土坑他、Ｂ区遺構掘り下げ作業

５月29日（月）雨後晴【矢駄アカメ】Ａ・Ｂ区遺構完掘状況写真撮影

５月30日（火）曇後晴【矢駄アカメ】Ｃ区遺構検出・掘り下げ作業、土層断面精査、Ａ区遺構平面図作成

５月31日（水）晴　　【矢駄アカメ】Ａ・Ｂ区土層断面精査、遺構平面図作成

６月１日（木）晴　　【矢駄アカメ】Ａ－２区１号土坑掘り下げ。Ａ・Ｂ区遺構平面図作成。

６月２日（金）晴　　【矢駄アカメ】Ａ－２区１号土坑拡張掘り下げ。Ｂ区遺構平面図作成。

６月５日（月）雨後曇【矢駄アカメ】Ｃ区土層断面精査作業

６月６日（火）雨後曇【矢駄アカメ】Ａ－２区１号土坑完掘。Ａ～Ｃ区遺構平面図作成。

６月７日（水）晴　　【矢駄アカメ】Ｃ区遺構平面図作成。補足調査。

６月９日（金）晴　　発掘調査器材搬出。現地作業完了。

【現地調査作業員】

小池みゆき　酒井静子　白山綾子　白山孝徹

白山田鶴　白山美子（以上志賀町矢駄地区）

第3図　調査区位置（ドット部分）と中世五輪塔確認地点（斜線部分）図（S＝1／2,000）

第３章　矢駄イケダ遺跡の調査

1. 遺跡の立地（第2・3図）

矢駄イケダ遺跡は加茂山地から延びる台地裾から旧福野潟低湿地肩部周辺の標高５ｍ程度に立地する。

2. 調　査　区（第3図）

調査区は裾から低地に落とす排水路敷設工事部分のセンターを主軸に１～４の４箇所のトレンチを設定した。

3. 土　　層（第4図）

調査の結果得られた土層の層序は、台地裾に位置する1トレンチでは１層耕土、２層床土、３層灰白色粘質土となり10層暗緑灰色岩盤の地山となる。

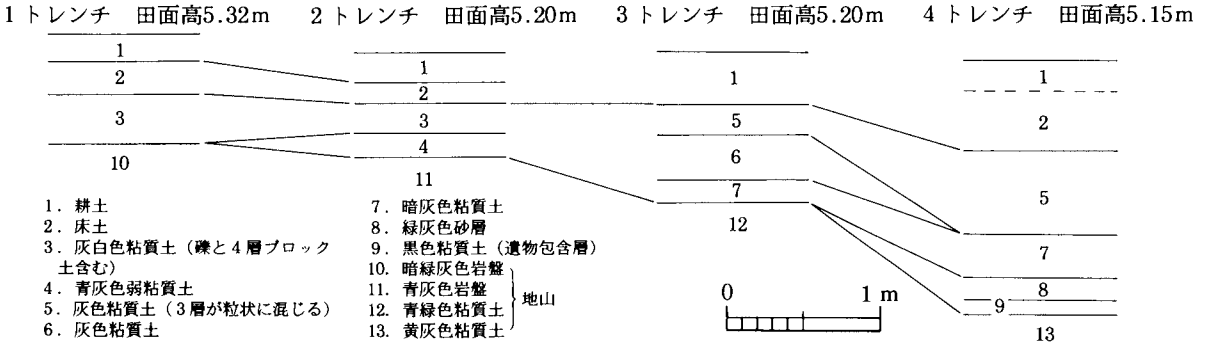
低地に下がるに従い、地山（ベース土）までの間層が増し、２トレンチでは４層青灰色弱粘質土が加えられ地山の11層青灰色岩盤になる。続く3トレンチでは、3・4層に対応する層として、５層灰色粘質土（３層が粒状に混じる）と6層灰色粘質土があたり、７層暗灰色粘質土が入り、12層青緑色粘質土のベース土となる。この辺りから台地形の岩盤は下がり検出されなくなり、低湿地になるものと思われる。

4トレンチでは5、7層と続き、８層緑灰色砂層の下に約0.1ｍ程度の厚さをもつ９層黒色粘質土が認められ、摩滅した土師質土器片が数点包含されていた。13層黄灰色粘質土がベース土となる。

4. ま　と　め

今回の調査では明確な遺構は検出されず、９層黒色粘質土で認められた遺物包含層も摩滅した土師質土器片が数点包含されていたに留るため、周囲からの流れ込みの可能性が高く、時期も古代以降としか捉えようもなく定かではない。

このような状況のため遺跡の本体はおそらく東上方の台地平坦部に求められると思われる。



第４図　土層柱状図（Ｓ＝１／50）

第４章　矢駄アカメ遺跡調査概要

1. 遺跡の立地（第2・3図）

矢駄アカメ遺跡は加茂山地から延びる舌状台地先端部の標高13ｍ程度に立地する。現況は水田である。

調査により検出された旧地形は、標高12.3ｍ程度を中心とするが、調査区（Ａ・Ｃ区）を分断する道路より南へ約20ｍ幅のＡ調査区中央付近では、東から西への緩やかな鞍部が確認された。

2. 調　査　区（第５図）

調査区は南北の排水路敷設と東西の農道工事により遺跡に影響を及ぼす部分に設定した。現況の道路を挟んで南側をＡ・Ｂ区、北側をＣ区とし、Ａ－Ｃ区を通る排水路センターを調査区主軸とし、Ｂ区へは直角に振った。

調査区内の区画割りはＡトレンチの1・2区杭（排水路センター杭）を基準としてこれより南を1区、北へ2.4ｍ間が２区、以北10ｍ間が３区、これ以北は４区とした。Ｂ区はＡ－３・４区杭から直角に東へ７ｍ間を１区とし、この杭から90度北へ１ｍ振った杭を新たに設定し、これより西に90度振った10ｍ毎を2・3・4区とした。Ｃ区は調査区の長さが10ｍに満たないため１区画とした。

3. 土　　層（第７～９図）

調査区の基本土層はＡトレンチの東壁で観察・判断し、Ｂ・Ｃトレンチにおいてもこれを基に判断した。

１層は現況農道に伴う盛土で、２層は水田の耕土、３層は床土である。４層黄褐色砂礫層、５層褐色粘質土の間層を挟んで、６層黒褐色土は土師器・陶磁器など中世の土器を含む遺物包含層で、遺構覆土となる。次の７層暗褐色土がこの遺構のベース土となり、続く８層黒褐色系土（６層＋７層）を挟んで、９層黄褐色土の地山となる。この９層まで下げると7層以上層の堆積前の遺構を検出することができ、縄文時代に至るまでの遺構が確認された。

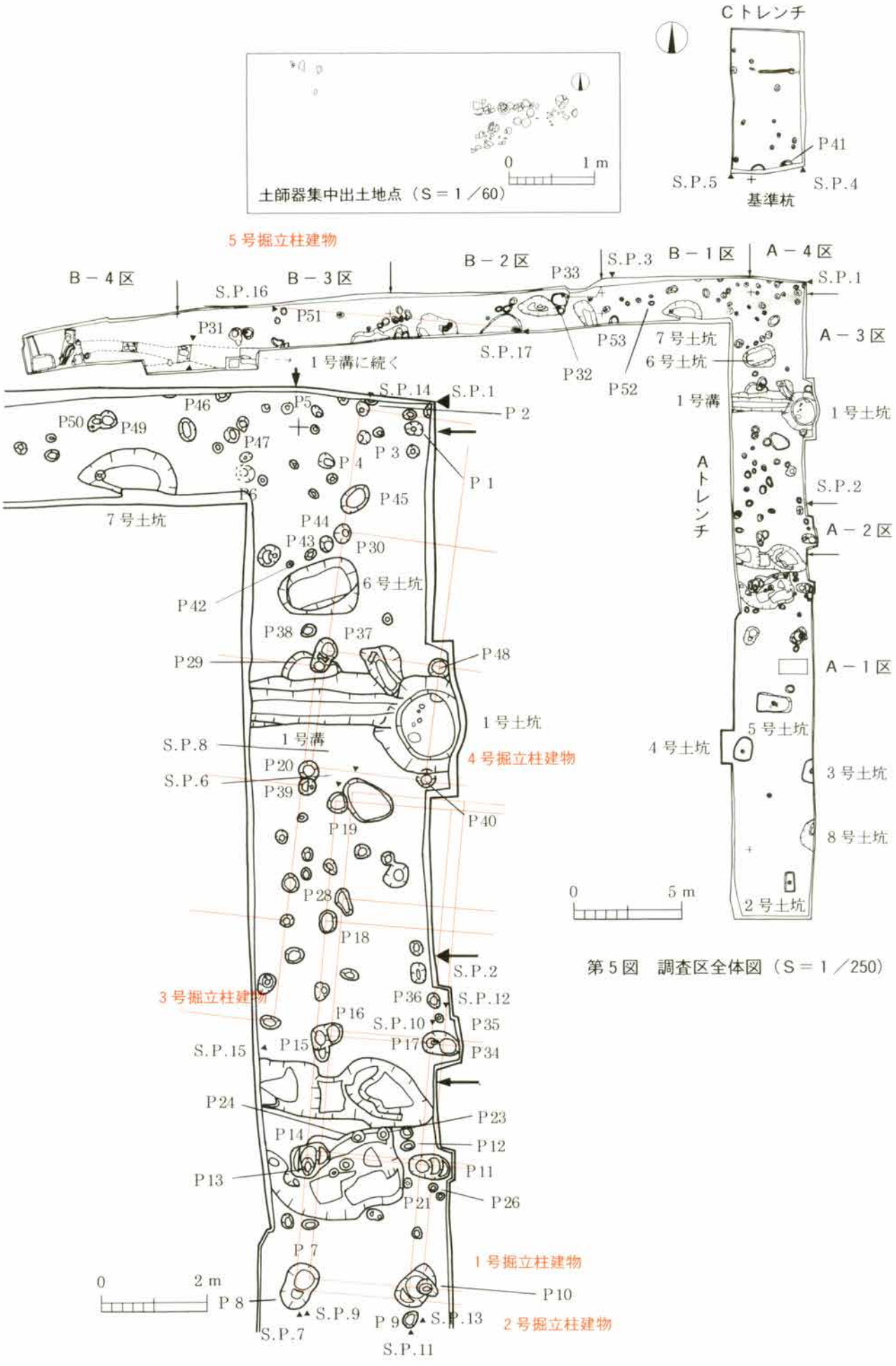
4. 遺　　構（第5・6・10・11図）

今回の調査により確認された時期は縄文時代から中世に至るが、主として縄文時代と中世の２時期で、その間の時代については若干の土器の出土は認めるものの、明確に特定するには至らなかった。

今回の調査により検出された遺構は主としてＡ区からＢ区東側にかけてで、７層暗褐色土をベース面とする中世を主体時期とするものと、９層黄褐色土の地山面をベース面とする中世以降縄文時代に至る時期もので、掘立柱建物５棟以上、土坑11基以上、溝状遺構３条以上（内１条は土師器皿を集中出土したものにあてる）、ピット等である。

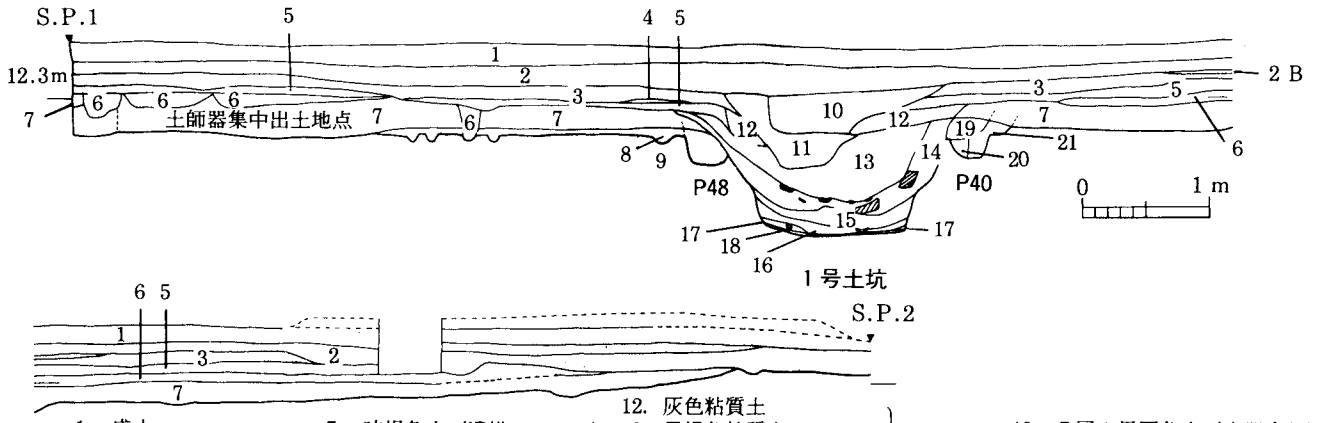
1. 掘立柱建物（第5・6・10図）

掘立柱建物は５棟復元することができた。内１～４号の４棟は中世期に、５号はかなり新しい時期と思われる。尚、この他、柱穴と成り得るピットも認められるが、狭小な調査区のため把握頻れなかった。本来はこの想定以上存在したものと思われる。



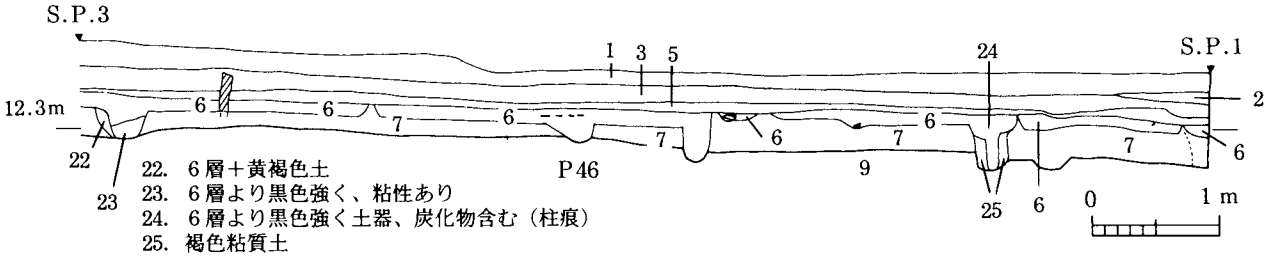
第5図　調査区全体図（S＝1／250）

第6図　A－1～4区・B－1区　遺構平面図（S＝1／100）



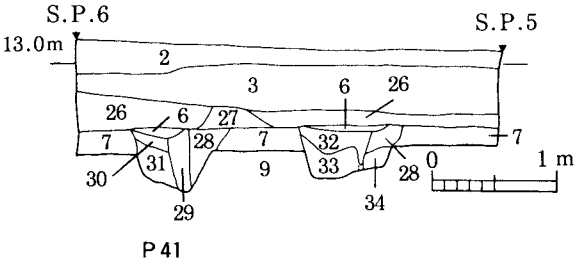
1．盛土
2．耕土（2B灰色土）
3．床土
4．黄褐色砂礫層
5．褐色粘質土
6．黒褐色土
（やや粘質、土器、炭化物含む）
7．暗褐色土（遺構ベース面）
8．6層＋7層
9．黄褐色土（地山）
10．灰褐色土
11．青灰色粘質土
1号溝
12．灰色粘質土
13．黒褐色粘質土
（炭化物及び土器含む）
14．暗褐色粘質土（礫含む）
15．黄褐色砂礫土
16．黒灰色シルト質土
17．10層＋11層
18．黒色土
1号土坑
19．7層＋黒灰色土（土器含む）
20．19層より淡い
21．19層＋20層

第7図　Aトレンチ調査区東壁土層断面図（S＝1／60）



22．6層＋黄褐色土
23．6層より黒色強く、粘性あり
24．6層より黒色強く土器、炭化物含む（柱痕）
25．褐色粘質土

第8図　A・Bトレンチ調査区北壁土層断面図（S＝1／60）



26．青灰色土（旧畑跡か）
27．灰褐色土
28．黒褐色土（炭化物含む）
29．28層より黒く炭化物多く含む（柱痕）
30．暗褐色粘質土
31．30層＋9層
32．29層より淡い
33．32層＋9層
34．28層＋9層

第9図　Cトレンチ調査区南壁土層断面図（S＝1／60）

1号掘立柱建物

A－1・2・3区に位置する4間（9.2m）×1間（2.1m）以上の総柱掘立柱建物で、2号掘立柱建物より古い。主軸はN－5°－Eを指し、建物面積は19.32㎡以上、柱間は桁行2～2.5m・梁行2.1mである。柱穴の形状は上端径0.4m程度の円形から、最大径0.9mを測る楕円形を呈するものまで認められ、覆土は黒灰色粘質土に地山土の黄褐色土が混入されたものである。柱穴からの出土遺物はP34より土師器皿（12・13）の他、P11・34出土の白磁皿（7・14）がある。

2号掘立柱建物

A－1・2・3区に位置し、1号掘立柱建物より新しく建替えによるもので、4間（9.3m）×1間（2.1m）以上の総柱掘立柱建物である。主軸はN－5°－Eを指し、建物面積は19.53㎡以上、柱間は桁行2.1～2.5m・梁行2.1mである。柱穴の形状は上端径0.5mを中心とする円形を呈するもので、覆土は黒灰色粘質土である。柱穴からの出土遺物はP8・17より土師器皿（3・4、10）、P13より白磁碗・皿（8・9）が認められる。

3号掘立柱建物

A－2・3区で1・2号掘立柱建物の東に位置する。桁行3間（6.7m）で、梁行は調査区外に延びるため不明の建物であるが総柱掘立柱建物を想定しておく。切合い関係からすると4号掘立柱建物より新しい。主軸はN－6°－Eを指し、桁行の柱間は1.9～2.5mである。柱穴の形状は上端径0.3m程度の円形を呈するもので、覆土は黒褐色土である。柱穴P28・29・39より土師器細片を出土している。

4号掘立柱建物

A－3区で1・2号掘立柱建物の北側に位置し、切合い関係からすると3号掘立柱建物と1号土坑より古い、3間（6.8m）×1間（2.1m）以上の総柱掘立柱建物である。主軸はN－7°－Eを指し、建物面積は14.28㎡以上、柱間は桁行2.3m・梁行2.1mである。柱穴の形状は上端径0.3m程度の円形を呈し、覆土は黒褐色土である。柱穴からの出土遺物はP48からの土師器皿（21）、P20からの白磁皿（11）である。

5号掘立柱建物

B－2・3区に位置し、4間（11m）の柱列をもつ建物と想定される。主軸はN－86°－Wを指し、柱間は2.6～3.1mを測り、柱穴の形状は上端径0.3m程度の円形を呈し、根固めと思われる拳大の石を検出している。覆土は灰色粘質土で1号溝と同一土質であるため、時期も新しいと思われる。

2. 土坑（第7・11図）

土坑は比較的掘方のしっかりとしたものを中心に11基検出した。1号は中世期に、その他2～11号は縄文時代に属すると思われる。

1号土坑

A－3区の調査区東壁際に位置し、上面にて検出した。東端部は調査区外となるため未検出である。1号溝に切られている。平面形態は略正円形を呈し、底面はほぼ平坦である。壁は若干外に開きながら0.4m程度立ち上がり、これ以上は緩やかな傾斜をなす。上端径は1.8m、下部上面径1.3m、底面径1.15m、深さは検出面より約0.95mを測る。覆土は18層黒色土・16層黒灰色シルト質土・15層黄褐色砂礫土・14層暗褐色粘質土（礫含む）・13層黒褐色粘質土（炭化物含む）・12層灰色粘質土の順でレンズ状に堆積し、主として上層の13層黒褐色粘質土において比較的まとまりをもって土師器碗皿類（23～51）が出土した他、白磁碗（52～55）・皿（56・57）青磁碗（58）、土錘（59～62）、鉄製品（63・64）の遺物を確認している。

2号土坑

A－1区の調査区の南端に位置する。平面形態は長方形を呈し、底面は平坦で中央にピットが存在する。壁の立ち上がりは僅かに外開きである。上端の長軸（南北）は0.94m、短軸（東西）は0.45mで、底面の長軸は0.82m、短軸は0.4m、深さ0.4m、底面中央部のピットは径0.1m、底面からの深さ0.26mを測る。覆土は壁際に3層黄褐色粘質土から6・8層の褐色系粘質土が、中央にはその中間的層（7層）、上層には2層褐灰色粘質土が堆積し、底面のピットには9層灰色粘質土が堆積する。出土遺物は縄文土器細破片が出土している。

3号土坑

A－1区の8号土坑の北約2mに位置し、東側は調査区外のため未検出である。平面形態は長円形と想定され、底面は平坦で中央にピットが存在する。壁は底部で僅かに膨らみをもつがほぼ垂直の立ち上がりである。上端径の長軸（南北）は1.1m、短軸（東西）は0.55m以上である。底面径の長軸は1.1m、短軸は0.5m以上で、深さ0.6m、底面中央部のピットは径0.15m、底面からの深さ0.1mを測る。覆土は6層（暗）褐色粘質土の水平から4層・12層・11層・2層とレンズ状堆積をし、底面ピットでは13層黒褐色系の粘質土となる。出土遺物は認められなかった。

4号土坑

A－1区の3号土坑の北西約2.5mに位置する。平面形態は長円形で、底面は平坦で中央よりやや南にピットが存在する。壁は底部で若干内側に反り気味ではあるがほぼ垂直の立ち上がりである。上端径の長軸（南北）は1.15m、短軸（東西）は0.9mで、底面径の長軸は1.05m、短軸は0.9m、深さ0.6m、底面中央部のピットは径0.2m、底面からの深さ0.1mを測る。覆土は6層の水平から4層・18～15層・11層・14層とレンズ状堆積をし、底面ピットは13層である。出土遺物は認められなかった。

5号土坑

A－1区の4号土坑の北約1.5mに位置する。平面形態は長方形で、底面は平坦で中央にピットが存在し、その東と西に10～20cm大の石が認められる。壁は南面の一部と北隅にて袋状に立ち上がるものの他は、上端に向かって開きながら立ち上がる。上端の長軸（東西）は1.65m、短軸（南北）東側0.7m、西側0.9m、中央部0.8m、底面の長軸は1.35m、短軸西側は0.86m、中央部0.8m、深さ0.4mを測る。底面中央部のピットは径0.2m、底面からの深さは0.24mである。覆土は壁際から6・4・16・11層と入り、中央付近にて22～20・2・19・1層とレンズ状堆積をし、底面ピットは13層である。この内11層において縄文土器の細破片を出土している。

6号土坑

A－3区に位置する。平面形態は隅丸長方形で、底面は平坦である。堀方は西辺と南辺にかけて二段掘りをなし、壁は傾斜をもって立ち上がる。上端の長軸（東西）は1.55m、短軸（南北）中央部で0.94m、底面の長軸は1.05m、短軸は0.5m、深さ0.7mを測る。覆土は単一層で暗褐色土が堆積し、縄文土器の細破片を出土している。

7号土坑

B－1区の調査区南壁際に位置し、南半部分は未検出である。上面からのピットに切られている。平面形態は略長円形と推測され、底面は丸みをもつ。壁の立ち上がりはやや外に開きながら傾斜する。上端の長軸（東西）は1.8m、短軸（南北）は0.8m以上、底面の長軸は1.1m、短軸は0.4m以上、深さ0.5mを測る。覆土は単一層で暗褐色土である。出土遺物は縄文土器の細破片を出土している。

8号土坑

A－1区の2号土坑の北北東約1.5mに位置し、東側は調査区外のため南半部分を検出。平面形態

は長円形と推測され、底面はやや丸みをもつ。掘方は二段掘りをなし、壁の立ち上がりはやや外に開きながら傾斜する。上端の長軸（南北）は1.56m、短軸（南北）は0.6m以上、底面の長軸は0.6m、短軸は0.3m以上、深さ0.36mを測る。覆土は単一層で暗褐色土である。出土遺物は認められなかった。

9・10号土坑

A－1・2区の9号土坑の北に位置し、10号土坑の西側は調査区外となる。両土坑の切り合い関係は不明である。9号土坑の平面形態は長円形で、底面は丸みをもち、壁の立ち上がりは北東側は外に大きく開く傾斜をし、南西側は三段掘りをなす。上端の長軸（東西）は1.8m、短軸（南北）は1.2m、深さ約0.2mを測り、10号土坑の平面形態は長方形で、底部は丸みをもち、壁は外に開き傾斜をなす。上端の長軸（東西）は1.1m以上、短軸（南北）は1m、深さ約0.2mを測る。覆土は両土坑とも黒褐色土で、11号土坑と同一土である。出土遺物は認められなかった。

11号土坑

A－1区の2号溝の南に位置し、P13・14・24に切られる。平面形態は略長円形を呈するが、西側へ向かって細く溝状に延びる。壁の立ち上がりは外に向かって開いていく。上端の長軸（東西）は2.5m以上、短軸（南北）は2m、底部は不整形な凹みをなし、深さ0.2mを測る。覆土は黒褐色土である。出土遺物は認められなかった。

3. 溝状遺構（第5・6・7・11）

溝状遺構として確実に捉えられるのは1号溝のみで、その他これに類すると思われる遺構を取り上げる。

1号溝

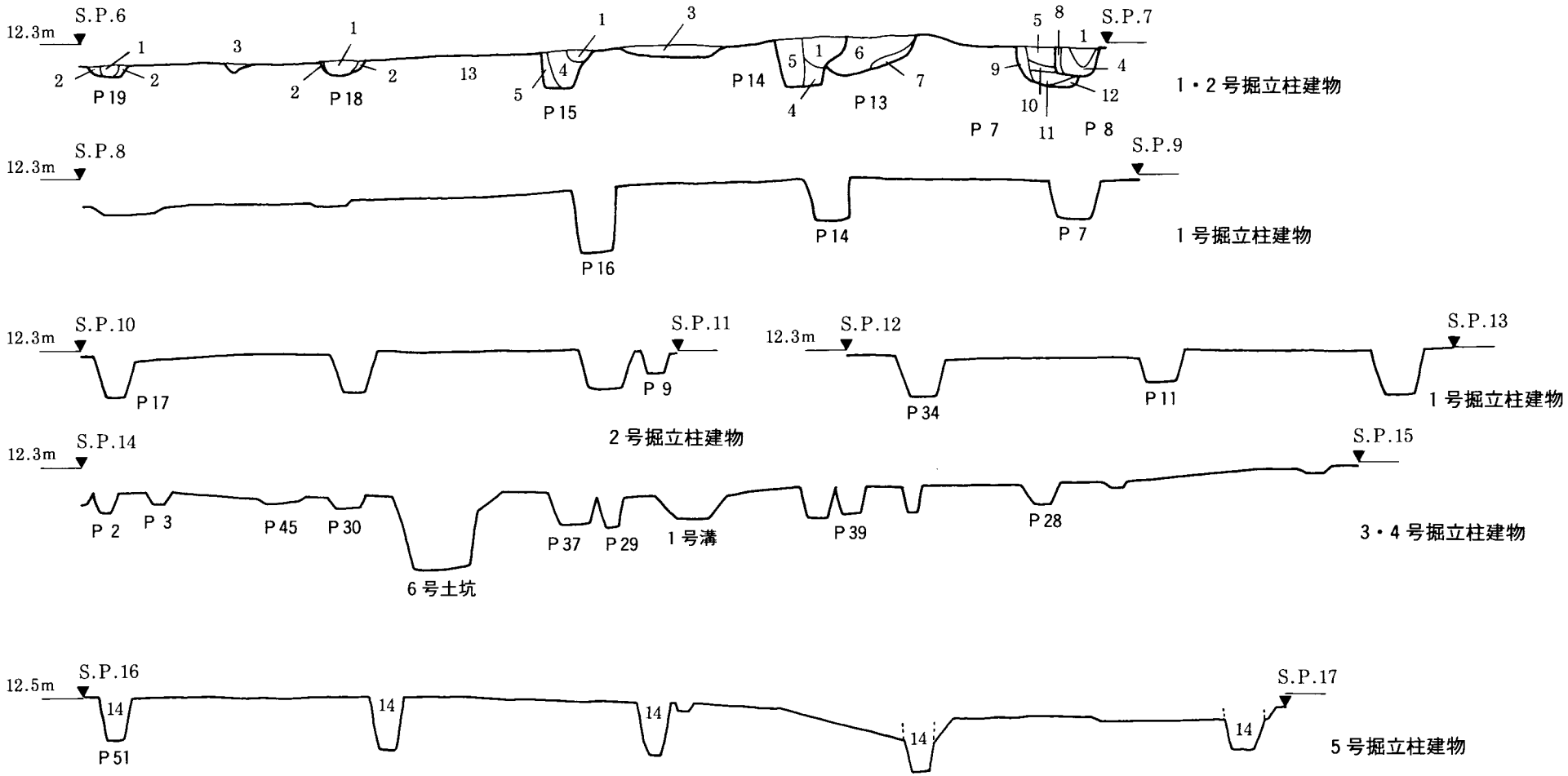
A－3区に位置し、上端幅約1m、深さ約0.3mを測り、東から西方向に流れる溝で、1号土坑を切っている。B－3・4区にてその延長を確認できる。覆土は灰褐色粘質土で、溝底より白磁椀（22）が出土している。但し、土層の対応関係からすると現況の水田以前機能していたと思われる。

C区検出溝

C区の北側に位置し、上端幅約0.1m、深さ約0.1mを測り、延長1.5mで東から西方向に流れる溝で、東端でピットに切られている。覆土は黒褐色土である。出土遺物は認められなかった。

土師器集中出土地点

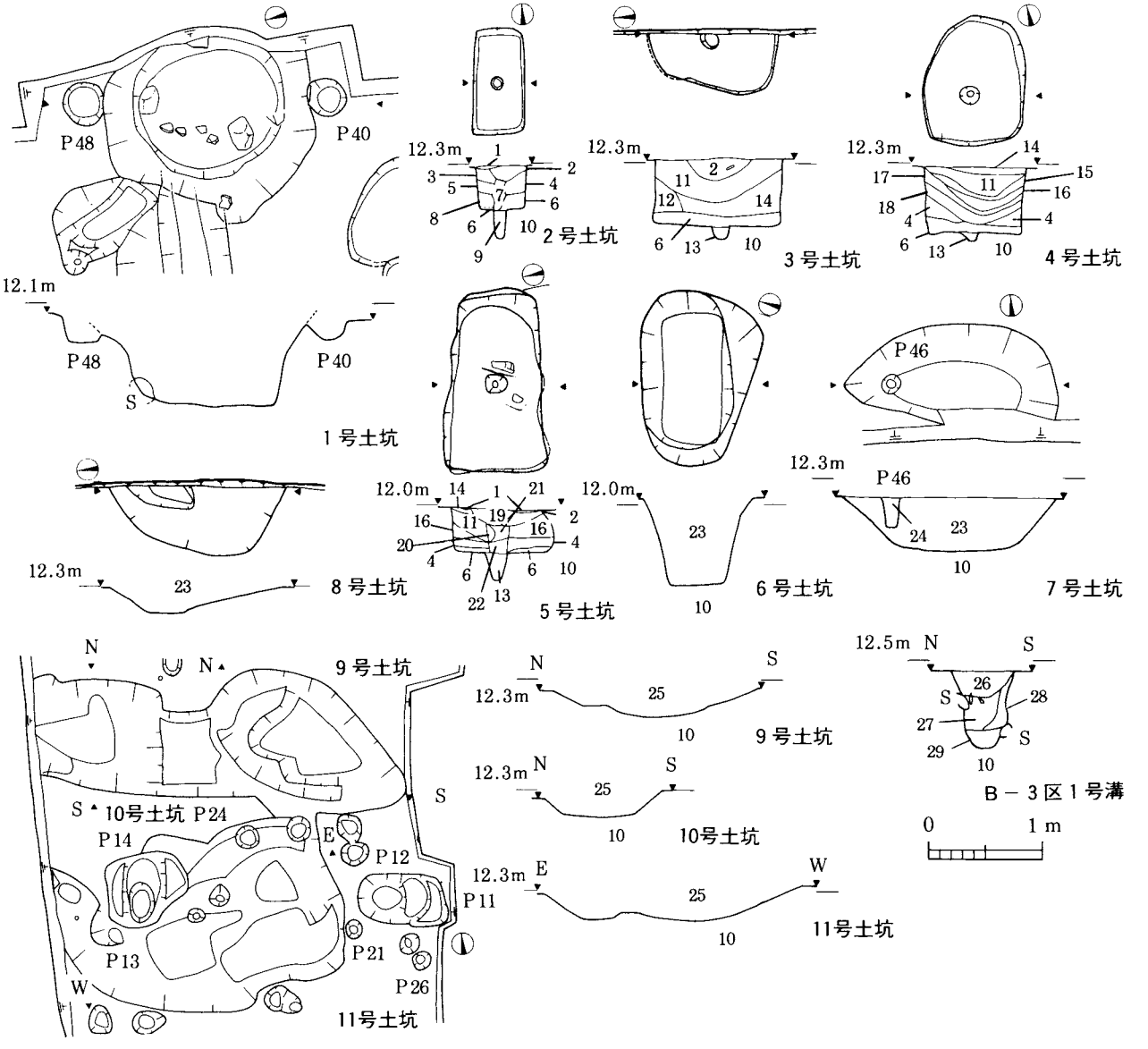
A－3・4区、A区の北端にて、約0.7m幅で東西方向に3.5m程度の帯状に土師器皿を中心に集中出土した。遺物は大半が東側からの出土で、土師器皿（66～92）・椀（65）、白磁碗（93・94）・皿（95・96）を認め、西端域で珠洲焼鉢（97）が出土した。また、東壁断面にて6層黒褐色土の幅0.7m、深さ0.1mの極浅い落ち込みが認められること、中央部にて調査時断ち割りを行った際、近似の落ち込み断面を確認していることを考え合わせると、浅い落ち込みないし、溝状遺構であった可能性も考えられる。尚、土器の出土状況が第5図にみられるように、特に東側に集中している点に関しては、西端地点とは約2m隔てることを考慮すると、ある程度は東側地点としての一括性も認められるように思われる。



1．黒灰色粘質土（炭化物含む）
2．1層＋13層ブロック土
3．暗褐色粘質土
4．3層＋13層ブロック土（炭化物含む）
5．4層と同じだが、炭化物少量
6．3層より暗い
7．濁黄褐色粘質土
8．3層より淡い
9．10層＋13層
10．褐色粘質土
11．黄褐色粘質土＋13層ブロック土
12．10層より暗い
13．黄褐色砂質土　地山
14．灰色粘質土

0　2 m

第10図　1～5号掘立柱建物柱穴断面図（S＝1／60）



1．褐黒色土＋灰色砂質土
2．褐灰色粘質土＋10層の地山ブロック
3．黄褐色粘質土（しまりあり）
4．3層＋暗褐色粘質土
5．4層より暗褐色粘質土強い
6．(暗)褐色粘質土
7．4と5層の中間的層
8．褐色粘質土（＋10層）
9．灰色粘質土（＋8層）
10．黄褐色砂質土　地山
11．2層に炭化物を含む層
12．4層より暗褐色粘質土強い
13．6層より黒色が強い
14．11層の黄褐色粘質土ブロック含まず
15．11層より黄褐色粘質土強い
16．11層より暗灰褐色土強い（炭化物含まず）
17．15層より明るい
18．16層と同じだが若干黄褐色粘質土強い
19．11層より黒色強い
20．褐色粘質土ブロック
21．暗灰色粘質土
22．21層＋10層の地山ブロック
23．暗褐色土
24．黒褐色土
25．黒～褐色土
26．灰(褐)色砂粘質土
27．灰色粘質土
28．青灰色粘質土
29．暗灰色粘質土

第11図　1～11号土坑平面図・土層断面図・B－3区1号溝土層断面図（S＝1／60）

第5章　出 土 遺 物

1. はじめに

矢駄アカメ遺跡の調査区内から出土した遺物は、細片を除いて約百点強存在する（第13図～第17図）。また、その出土の範囲もA調査区とした、南北方の延長31ｍトレンチの北半にほぼ集約的に遺存していた遺物群であるが、内容的には当該期の遺構が不明で包含層中として採取された、弥生時代後期頃と推測される匙形土製品他２点（第17図98～100）を除いては、上記範囲中の主たる遺構である、古代末葉ないしは中世初葉頃かを中心として若干前後する幅が推測される掘建柱建物（跡）数棟分と、これをとりまく営為所作に係わる遺物群とみられるが、その出土部位と状況としては、重複して建て替えがあるとみられる第１～２号建物他柱穴内から各数点程度の断片を含め計21点（第13図）の出土がある他、その多くはこの建物の北縁に穿たれていた第１号土坑中より完形品を一部含んだ計42点と、これより数ｍ離れた北側で、帯状でかつ平面的な出土状況もっていた一群（土師器集中出土地点と仮称して採り上げているが、断ち割り等々では下部に浅い溝ないし土坑状の窪みが観察されている）が計33点で完形品が主体となっている。

その他では、一号土坑を切って上面に東西方の一号溝があり、この溝の年代性の特定はできないが上記の掘建柱建物等々の時期とは隔絶した後々の段階の遺構ではあるが、白磁底部１点が出土しており、あとは包含層中他で４点の遺物で、建て替え等々を含めた当該建物期にかかわると推測されるものがそのほとんどとなっている。

よって、この時期の遺物群のなかみを中心とした補足をしていきたい。

2. 遺物群のなかみについて

図化掲示できたこの期の遺物は総計101点であるが、そのほとんどが碗・皿類（91点）で、他に鉢類１点、土錘４点、小物の鉄製遺物４点、砥石１点の内訳となる。

約91％を占める食膳器類のやきものの種類別の構成では、土師器72点（約79％）、白磁16点（約17％）青磁２点（約２％）、珠洲１点（約１％）である。

このうち土師器では、底部外面にロクロ回転による糸切痕をそのまま留める（ロクロ種）一群と、これとは成形手法が異なる、体下半部から外底にかけて円味をもって指頭によるとみられる凹凸を留める（非ロクロ種）一群が、いわば混在一体的に含まれており、この比率は全体で（摩耗して定かでない１点を除外）前者が30点で約42％、後者が41点で約57％であるが、遺構別的あるいは一定度の出土状況的まとまりのあった一号土坑と土師器集中小区の各比率では、第一号土坑は29点中ロクロ種が19点（約65.5％）、非ロクロ種10点（約34.5％）であるのに対し、土師器集中小区では28点中ロクロ種が５点（約17.9％）、非ロクロ種23点（約82.1％）となっている。

一般的に古代から中世へにしたがってロクロ種土師器から非ロクロ種土師器へと波及転換が進んでいったことは、多くの研究者が指し示してこられ自明のこととなっている。そして、当遺跡では波及期頃かと推測される、口縁部というべきか体中位から口縁部で強い二段のヨコナデのはいる、いわゆる平安京系土師器とナデが一段様となったやや後出性を想わせる非ロクロ土師器も含まれているようで、また、在来種のなかにも外来系種を真似たような浅皿もいちぶあり、少なくても２ないし３小期程度の土器（群）が総体のように思えるが定かにできない。

そこで、一号土坑内土師器と集中的出土区の土師器の様相を中心とした対比のなかからなにがしかの課題を探してみたい。

3. 土師器の形の違いを中心に

第12図は調査区内から出土した土師器を、形の異なる大振りのものを基軸としてそれに似通う小型品をその下段に置く、左端縦軸（存在している大方の形態）に配し、それより派生あるいは変化しているように思われるものを概ね横列方向に並べてみた。また、出土の同伴的関係を示す印しとして、一号土坑中からのものにはその横に黒丸を、土師器集中出土小区からとなるものには白丸を、無印のものは柱穴内および包含層中のものである。

一号土坑に内包されていた土師器は、ロクロ（R）種が主体で非ロクロ（N）種が従の状況にある。そして、多様とまではいえないが、比較的明確な特徴をもつR種大振りの碗４種類と、全くではないが、これに同様の小型の碗ないし皿が存在していそうであることと、それらに折衷的な形をとる小型碗ないし皿も認めることができるが、推測となるが、大型小型を含めて連動する器形器種の淘汰の進捗過程、あるいは器にもたせる用途機能の限定的集約化と消長のその一過程を映しているようにみえ、また、この遺跡中のR種土師器でいうところの古相をなすものと、同系種とみられるが器高を下げて明らかに皿化した新相のものが共伴状態であり、N種では、大振りの皿４点があるが口縁の二段ナデが曖昧化したもの２点と、一段的あるいは一段となって口縁部を碗状に上方へ短くもちあげるものと、口唇端部に外面側からのゆるい面取りを施した新相器形の各１点が加わっていて、小型皿も後者のものに属して古相タイプのものは含まれていない。

一方、一号土坑と対峙的に土師器等が密集して面的に遺されていた、集中出土地点の遺物群は、遺構に伴っていた一群であったかどうかは判らない。しかし、土師器類は一号土坑出土品よりも完形にちかい遺品が多く、それなりの一括性の主張を提示しているようにも思える。

この群中の土師器では、R種５点・N種23点強で主体となっていることは上記したとおりであるが、少なさは、R種全体的な対比を介した新旧的関係への位置付けにとっては厳しく、慎重を要するが、少なくとも皿類の形態的変化のなかでの当遺跡における最新タイプには到達しておらず、どちらかといえば古相領域に属した類と推定する。

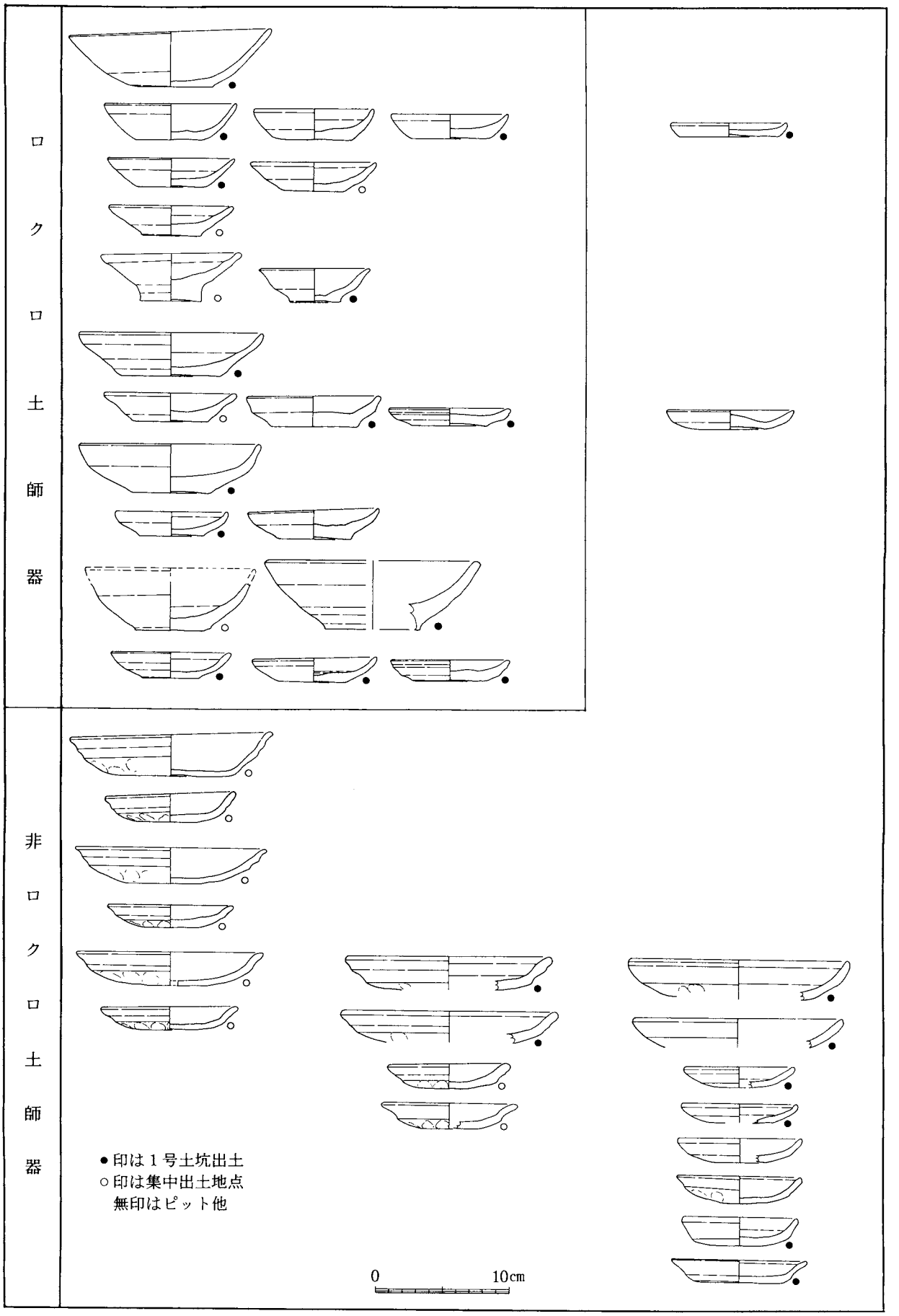
このことは、N種においては殊に大振り品では顕著な二段ナデが施されており、小型品でも概してそうであるが、器高に係わる要因なのか幾分かの時間的年代幅のある製品が含まれているのであるか判らないが、二段が途中より一段に糾合されているもの・二段の稜線が明瞭ではなく一段様となるものなども一定程度存在する。また大振り品のなかに、口縁部を外反させるものがあり、当初来からの器形種としてあるのか若干の後出的要素となるのか小型品でも同じ様相を含んでいる。

けれども、一号土坑中のN種群は、器体調整の変質化とともに器形自体に明らかな変化が伴った新しいタイプで占められている点、これらに先行した一群であったと想定され、上記のR種とは同時期性下にあったと考えたい。

ここで、以上についての若干の整理をしておきたい。

一号土坑中の土師器群を、全て同時期一括と理解することはできなくなった。廃棄時ないし順次埋納等々による集合体としての内包の一括と考える。

ロクロ種・非ロクロ種ともに、器形の種類ごとにほぼ形態的な変化が伴っているようで、古相的形態と新相的形態を分極してみると移行的な中間形態も存在するようだ。それはまた、器種的な消長・置換といった変換過程の終末的様相を見え隠れさせているように思える。



第12図　土師器の様相

憶測であるがそれは、在来R種が大振りと小ぶりの碗皿のセット的な数器形(種)に集約化してきたある段階に外来系N種の初期的な採用(あるいはその逆もしれないが)をおこなったが、しばらくは、R種は従前を引きずり保持される(第一段階)が、R種は殊に大振り器種を消失化させると同時に小型種でも器形の変化と器種の減退化が進み、N種でも調整の粗略性と器形の幾分の変化があり、次ぎへの変換の過渡的段階(第二段階)が想定でき、R種N種ともに概して器肉も厚く、一面では豪放的で闊達な印象のなかに反面で、一時代性の終焉の予感のなかで新しい始まりをどう迎えるかの模索ともとれる、R種中の最新(終)形態と想われる皿の二種に、外底面を回転糸切り痕のままとしながらも、体部〜口縁に、二段様となるナデ(器高が低いことにもよるか、断面細やかな波状)をそのまま残すものを生じさせている。N系種に似せたものと考えるが、製作技術の受容化とすべきかまたは、N種の趨勢化を了知しつつもなおかつ在来伝統R種の存命への模索と試みとすべか判らない。大局にかわりはないのであるが、具体的にこの土器相がN種土器とのかかわりのなかでどの位置をしめているかの如何によって微妙に評価・理解が異なってくる問題でもあり、今後に委ねたい課題の部分でもある。

次の段階では、R種技法による土師器が消失してN種によるものにほぼ全面的に転換・移行した様相が第三段階に思える。形態的に、R種の系譜をとる小皿(N種系譜からの派生とは考えられないもの)のなかで、極少で明確さを欠くが外底面にもナデ調整として仕上げたものが認められ、それは、N種の最も新しいと思う群の特徴の一つである、口縁部あるいは口唇部の上方向へのつまみ上げ、端部のゆるい面取りをおこなっているものに共通項を求め得る。

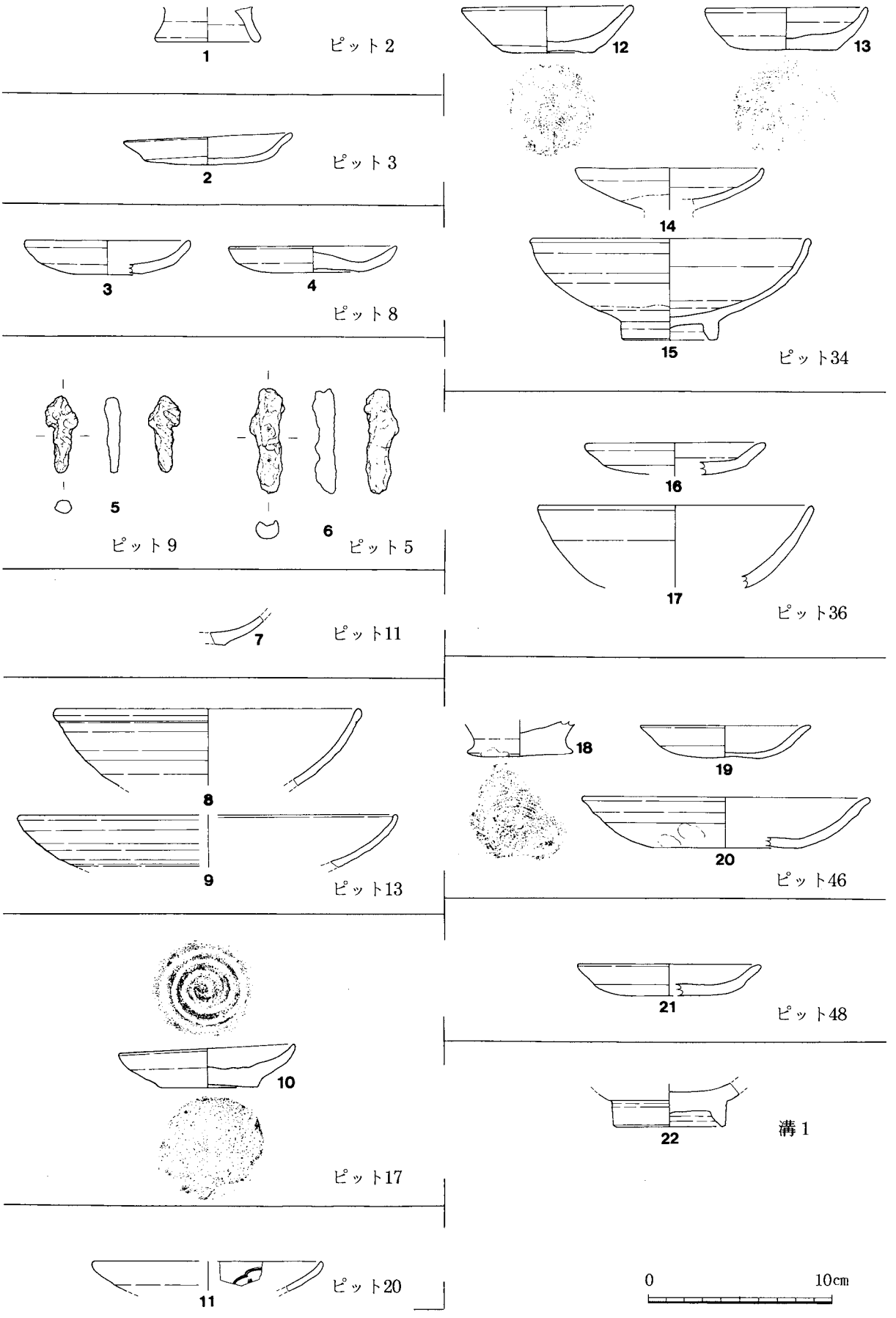
4. そ の 他

陶磁器類についてはかなり小片となったものが多く、同一個体片の一部を重複して掲載しているかもしれないが、概ね15個体はある。内訳は中国製白磁碗7・白磁皿5・同、龍泉窯系青磁碗2・珠洲鉢1で、白磁が主体的となっている。これらは、建て替え重複の柱穴・一号坑・土師器集中出土地点・包含層等の土師器群とほぼ共伴出の関係にある。そして、土師器類の様相と形態的変化を介して一号土坑内資料には幾分かの年代的幅をもつ集合体とみなされることとも係わり、陶磁器類もこの範疇にありそうだとしか提示できない。一般的にいって、県内のいくつかの調査事例のなかで、当遺跡中の古相領域土師器群に玉縁の白磁碗Ⅱ類そしてⅣ類などが伴出し、追って青磁碗、珠洲等が加わってきていることは一致して先学の示されるとおりであり、土師器集中出土地点からの珠洲を伴出的状況を優先して古相領域に含めることには無理があり、むしろ、新旧相まで内包した第一号土坑中の第三段階とした、R種N種ともども旧遺制からの脱皮的な土師器群に対応するように想われる。

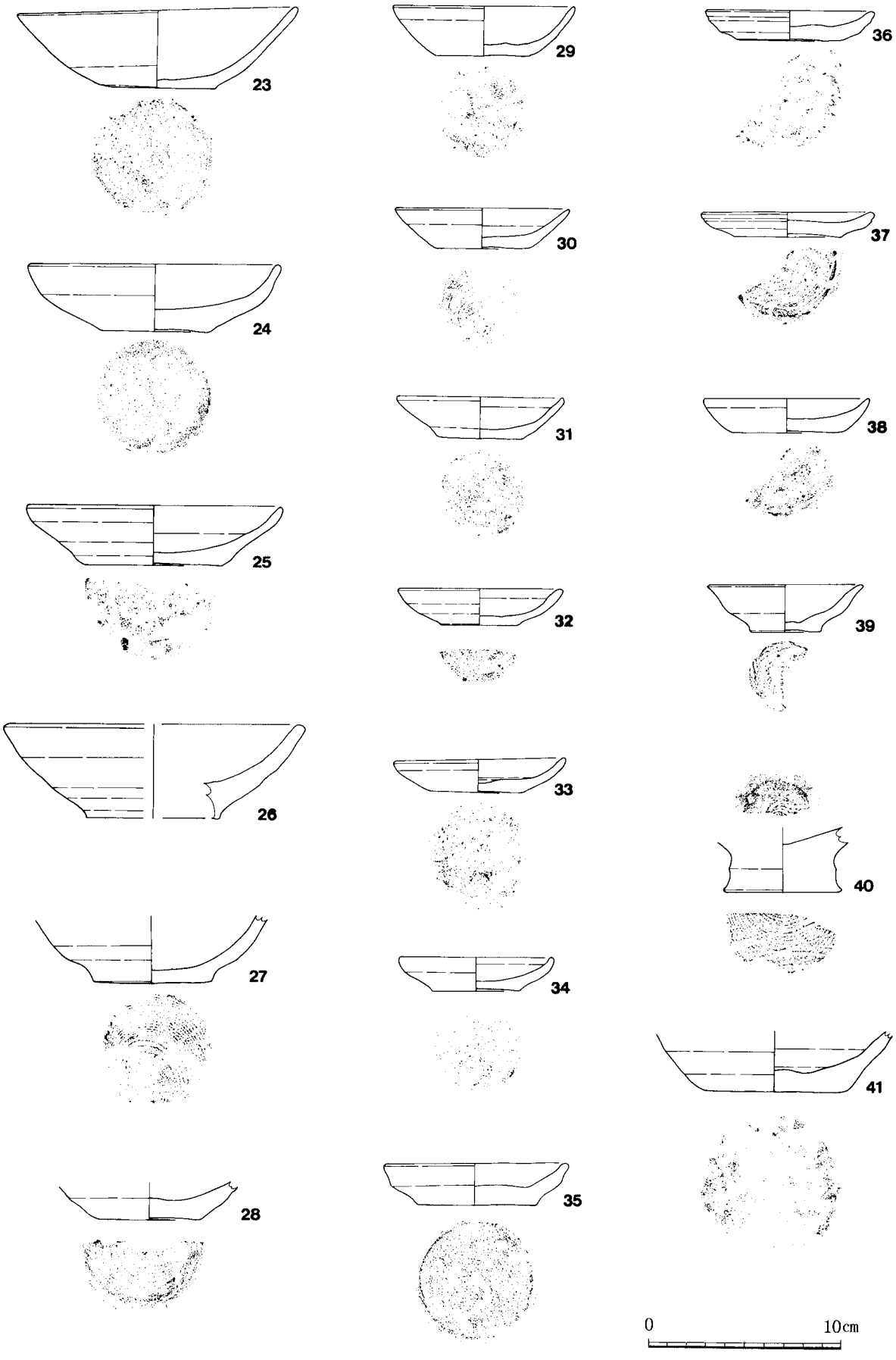
年代的な位置づけに関しては、出土した土器等から先学の研究成果に依拠するが、第一段階とした古相R種土師器群と伴出的関係にあった平安京系N種土師器は、従来よりその波及と存在が指摘されつつも未発見のままとなっていた。今回初めて、その実像性の一端と在地の土器相との接点あるいは年代的な比定に関しても、今後の研究をすすめるうえで有用な発見であるように想われる。

この種の土師器を、平安京跡出土資料に類縁を求めた場合、口縁部を外反させるものと上方へ立上げる口径14cm強の、平安京左京四条一坊ＳＥ８掘り方の資料(11Ｃ末葉頃)と非常によく似た形態をもっっている。一方、最も新しいとした第三段階の土師器群との時期に対応すると考える珠洲(捏鉢？)は、12世紀後半代とされる珠洲編年Ⅰ期中に納まるようにみうけられるので、全く大まかとなるが、11世紀末葉頃〜12世紀末葉頃にかかる遺物群と想定して今後の諸研究に委ねておきたい。

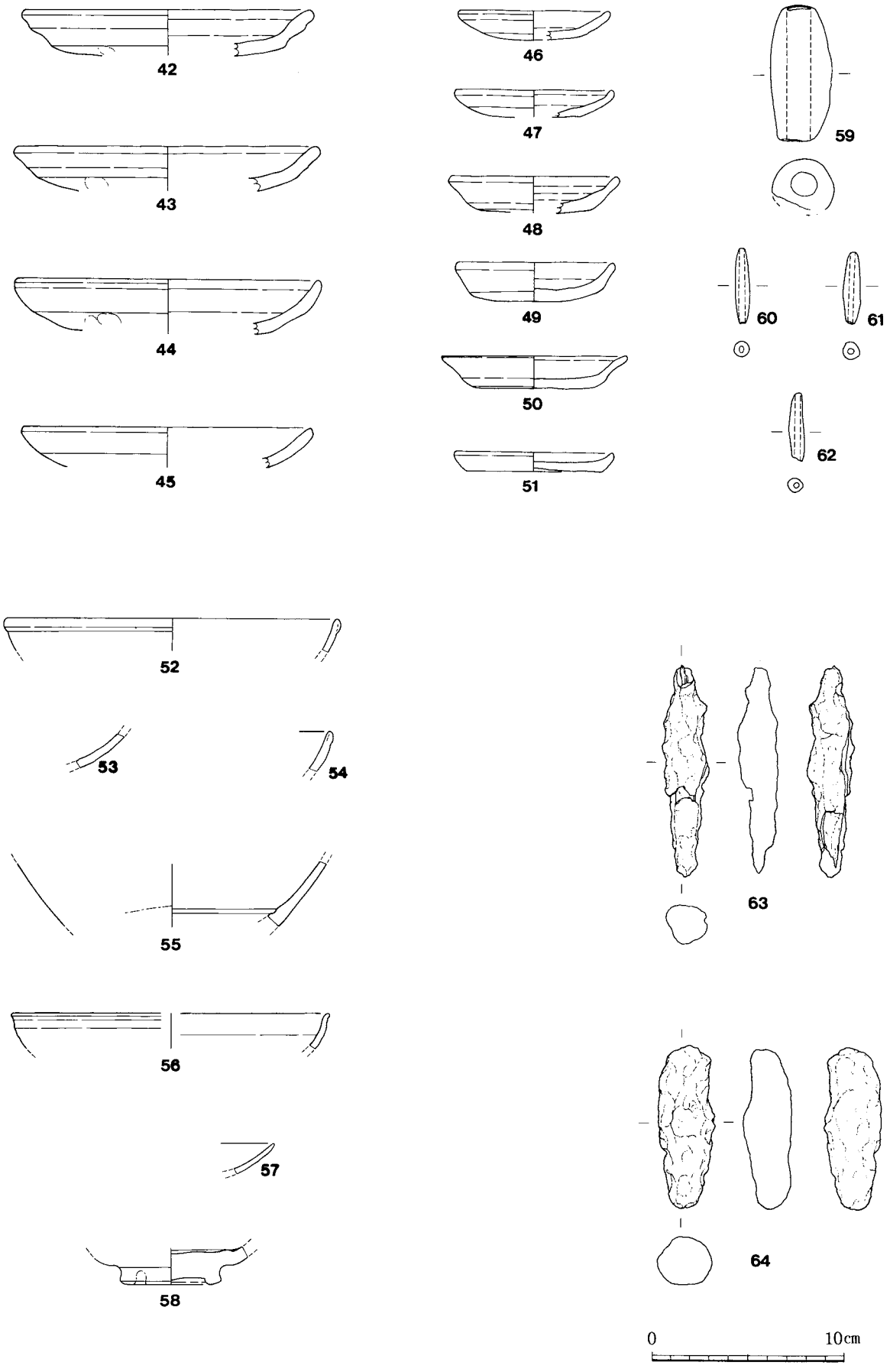
なお、土師器群はR種N種ともに砂粒を一定的量を含み、よく似た胎質と同時に色調もくすんだ色合いである。また、いびつなものがほとんどである。



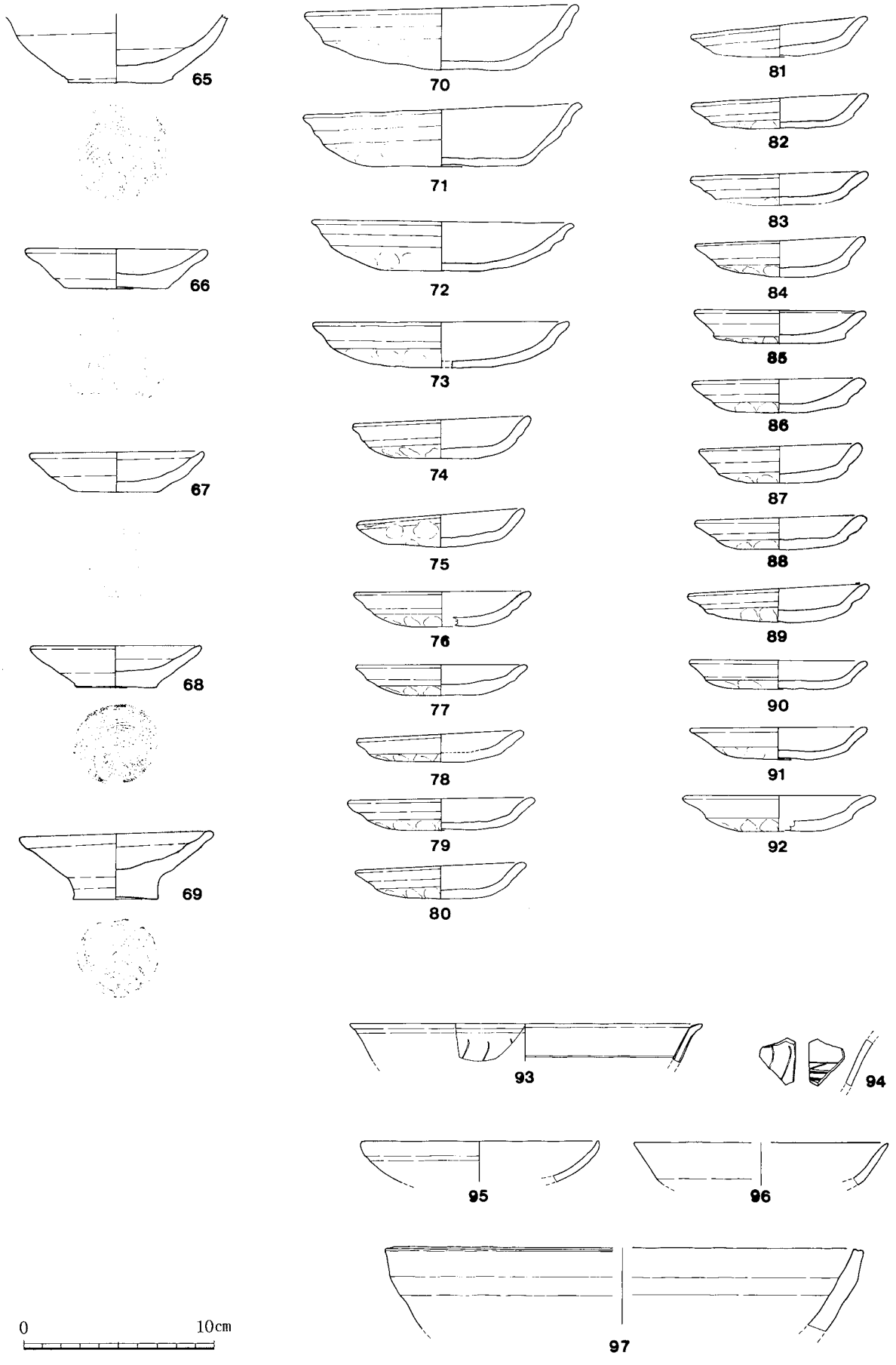
第13図　出土遺物1（柱穴・溝跡内）



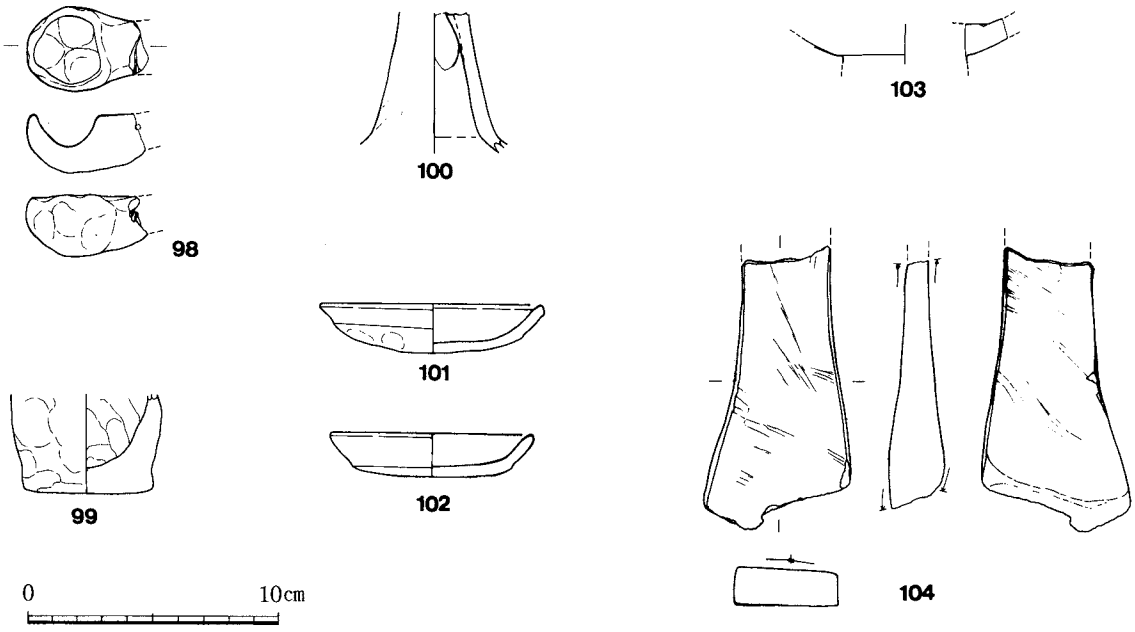
第14図　出土遺物２（１号土坑）



第15図　出土遺物３（１号土坑）



第16図　出土遺物４（土師器集中出土地点）



第17図　出土遺物５（包含層、その他）

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（1）

No.	出土地点	種別	法量(cm) 口径	器高	底径	色調 (内)(外)	焼成	胎土	調整 (内)(外)	備考
1	A3～4区ピット2	土師	—	高合高 1.7	高台径 5.4	淡黄橙色 〃 〃	やや甘い	白色半透明粗粒極少、雲母細粒多、海綿骨片・赤色粒一定量含	ヨコナデ 〃	
2	A3～4区ピット3	土師(Ⅲ)	8.8	1.5		にぶい橙色 〃	〃	雲母細粒、赤色粒	ヨコナデ (表面摩耗)	(非ロクロ種)
3	A3～4区ピット8	〃	8.8	1.8		淡黄橙色 〃	〃	白色粒、白色半透明粒、海綿骨片少量	ヨコナデ (表面摩耗)	口唇外端面取り (　?　)
4	〃	〃	9.0	1.9	4.8	淡黄橙色 〃	並	白色粒、白色半透明粒(1mm弱)、海綿骨片多。黒雲母細粒含	ロクロナデ (表面摩耗)	摩耗して不明だが回転糸切り？
5	A1区　ピット9	鉄製品	(錆化のため寸法不詳であるが、現状長4.2cm、最大幅1.7cm、最大厚1.3cm)							釘？
6	A1区　ピット5	〃	(錆化のため寸法不詳であるが、現状長5.7cm、最大幅1.6cm、最大厚1.2cm)							釘？
7	A2区　ピット11	白磁(Ⅲ)	—	—	—	胎色灰白色。釉色は緑っぽい白色で、薄く施すが透明感に欠ける。	堅牢	緻密		内外面とも貫入は細かく密。
8	A2区　ピット13	〃 (碗)	16.3	現存 4.2	—	黄味を帯びた白色胎。釉はやや透明感があり胎色のせいか浅黄色。	〃	わずかに気泡を含むが、緻密。		釉薬は薄く均一的だが、外面に少量の釉溜まりあり。
9	〃	〃 (Ⅲ)	20.4	現存 2.8	—	胎色は灰色っぽい色。釉はやや透明感があり緑色を帯びる。	〃	〃		釉は薄く均一で、内外面とも僅かに貫入がみられる。
10	A2区　ピット17	土師(Ⅲ)	9.4	2.1	5.3	淡黄橙色 〃	やや甘い	白色粒、半透明粒とも1mm大～強を多く含む。	ロクロナデ (見込に渦痕まま) ロクロナデ (外底面糸切痕まま)	
11	A2区　ピット20	白磁(Ⅲ)	12.3	現存 1.6	—	胎色は浅い黄色。釉色はやや透明感のある黄味を帯びた白色。	良	やや気泡を含み、僅かにザックリ感がある。		釉は薄く均一で、内外面とも貫入は細かく密。
12	A2区　ピット34	土師(Ⅲ)	8.6	2.3	5.7	にぶい橙色 〃	やや甘い	白色粒、半透明粒とも1mm大～強及び海綿骨片とも多く含む。	ナデ (全体的に摩耗。外底面は糸切痕まま)	
13	A2区　ピット12 ピット17 ピット34	土師(Ⅲ)?	9.0	2.5	5.0	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも一定的量。海綿骨片多い。	ロクロナデ 〃 (外底面糸切痕まま)	P34主出土。
14	ピット34	白磁(Ⅲ)	10.1	現存 2.3	—	胎色はうすい灰白色。釉は浅黄色で、白濁化している。	良	緻密		二次的被加熱を受けている。
15	〃	〃 (碗)	14.9	5.5	5.2	素地は灰白色で、釉はやや透明感に欠けた浅黄色。	良	緻密		釉は薄く均一で、内外面とも貫入ある。外底面に墨痕？
16	A2区　ピット36	土師(Ⅲ)	9.8	1.7	—	灰褐色 〃	良	黒雲母細粒、海綿骨片ともに少量で、精良感あり。	ヨコナデ (底面ナデ) ヨコナデ (底面ナデ)	
17	〃	〃 (碗)	14.8	—	—	にぶい橙色 〃	やや甘い	海綿骨片一定量含。黒雲母、赤色粒少量含。	ロクロナデ 〃	
18	A2区　ピット46	土師	—	—	5.8	にぶい褐色 〃	〃	白色粒、半透明粒1mm大～強と、赤色粒多く含む。	ナデ (外底面糸切ままま)	

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（2）

No.	出土地点	種　別	法量(cm)			色　調 (内)(外)	焼成	胎　土	調　整 (内)(外)	備　考
			口径	器高	底径					
19	A2区　ピット46	土師(Ⅲ)	9.2	1.8	—	にぶい橙色 〃	やや甘い	白色粒、半透明粒、赤色粒とも一定的量と黒雲母細粒多く含む。	ヨコナデ (底面ナデ) ヨコナデ (　〃　)	全体的に摩耗。外底面でこぼこ。
20	〃	〃 (〃)	15.5	2.8	—	〃 〃	〃	〃	ヨコナデ (底面ナデ) 上半二段のヨコナデ (下半ナデ)	外面下半は指押さえの凹凸あり。
21	A2区　ピット48	〃 (〃)	9.8	1.7	—	淡黄橙色 〃	〃	黒雲母細粒、赤色粒粗粒含。	ヨコナデ (底面ナデ) ヨコナデ (　〃　)	表面摩耗著しい。
22	A3区　溝1	白磁(碗)	—	—	6.1	素地は灰白色。釉は透明感のない青味を帯びた白色。現在内面のみ。	良	緻密		釉は薄く均一
23	A3区　1号土杭	土師(碗)	14.5	4.4	6.1	淡黄橙色 〃	やや甘い	白色粒・半透明粒1mm大、海綿骨片、雲母粒それぞれ一定量。	表面摩耗している。 (ロクロナデ)	外底面糸切痕。
24	〃	〃 (〃)	12.9	3.7	5.6	淡黄橙色～ にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒の粗粒一定量と細粒多。海綿骨片・雲母多。	〃	外底面糸切痕。
25	〃	〃 (〃)	13.2	3.2	7.2	にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒少量、雲母細粒多、赤色粒一定量含。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
26	〃	〃 (〃)	19.2	5.0	11.2	にぶい橙色 淡黄橙色	〃	白色粒・半透明粒・海綿骨片・雲母粒とも多く含む。	ロクロナデ 〃 (外底面不詳)	
27	〃	〃 (〃)	—	—	6.2	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒一定量・海面骨片少量含む。	ロクロナデ 〃	外底面右回り回転糸切痕まま。
28	〃	〃 (〃)	—	—	5.4	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒・海面骨片・雲母とも一定量含む。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
29	〃	〃 (小碗)	9.4	2.6	5.0	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒・海面骨片多。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
30	〃	〃 (〃)	9.0	2.1	5.0	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒一定量、海面骨片多く含む。	ロクロナデ 〃	外底面右回り回転糸切りまま。
31	〃	〃 (〃)	8.6	2.2	4.6	にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒多。海面骨片一定量含。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
32	〃	〃 (〃)	8.4	1.9	4.0	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒少量、海面骨片多く含む。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
33	〃	〃 (〃)	8.8	1.8	5.1	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒とも多。海面骨片、雲母一定的量含む。	全体的に摩耗 (ロクロナデ？)	(底部平高台風)
34	〃	〃 (〃)	8.0	1.8	4.6	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・海面骨片多。雲母少量。	ロクロナデ 〃	外底面右廻り回転糸切りまま。
35	〃	〃 (Ⅲ)	9.4	2.3	6.1	橙色～ にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・雲母・海面骨片多く、赤色粒少量含む。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
36	〃	〃 (〃)	8.5	1.6	5.6	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも極少量、雲母・軟質灰白色粒多。海綿一定。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（3）

No.	出土地点	種　別	法量(cm)			色　調 (内)(外)	焼成	胎　土	調　整 (内)(外)	備　考
			口径	器高	底径					
37	A3区　1号土杭	土師(Ⅲ)	8.6	1.3	5.5	にぶい黄橙色 淡黄橙色～ にぶい橙色	やや甘い	白色粒、半透明粒とも極少量、雲母・軟質灰白色粒多。海綿一定	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
38	〃	〃（〃）	8.4	1.8	5.6	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒一定量、赤色粒多く含む。	ロクロナデ (表面幾分摩耗) 〃	外底面糸切痕。
39	〃	〃（小碗）	7.8	2.5	3.8	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒・赤色粒少量、雲母一定量。	ロクロナデ 〃	外底面糸切痕。
40	〃	〃（〃）	—	—	6.2	橙　色 〃	〃	白色粒、半透明粒・海綿骨片一定量、雲母多く含む。	ロクロナデ (底面ハケ状具痕一部のこる) 〃	外底面糸切痕。糸切り後条線加。
41	〃	土師	—	—	7.3	にぶい黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・赤色粒・海綿骨片とも一定量。雲母少量含む。	表面摩耗で不詳。 (ロクロナデ？)	底部は平底。
42	〃	〃（Ⅲ）	14.8	推定 (2.6)	—	にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・雲母多く含み、海綿骨片一定量含む。	ヨコナデ 上半二段のナデ	(非ロクロ種)
43	〃	〃（〃）	15.4	〃 (2.6)	—	にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒極少。雲母多。海綿骨片・赤色粒一定量含む。	ヨコナデ 上半二段のナデ	(　〃　)
44	〃	〃（〃）	15.6	〃 (2.9)	—	にぶい橙色	〃	白色粒・半透明粒・雲母粒とも多。海綿骨片少量含。	ヨコナデ 上半ゆるい二段ナデ (端部面取)	(　〃　)
45	〃	〃（〃）	15.0	〃 (2.6)	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・雲母とも多海面骨片一定量含む。	ヨコナデ 〃 (口唇端部面取)	(　〃　)
46	〃	〃（〃）	7.8	1.5	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも少し、海綿骨片多く含。	ヨコナデ 〃 (　〃　)	(　〃　)
47	〃	〃（〃）	8.2	1.4	—	にぶい黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも細粒多。海綿骨片・赤色粒とも一定量含。	ヨコナデ 〃 (　〃　)	外底面板状圧痕 (非ロクロ種)
48	〃	〃（〃）	8.6	1.9	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも少し、雲母一定量含む。	ヨコナデ 〃 (　〃　)	(　〃　)
49	〃	〃（〃）	8.1	2.1	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒・海綿骨片とも多。赤色粒少。雲母一定量含。	ヨコナデ 〃 (　〃　)	(　〃　)
50	〃	〃（〃）	9.6	1.7	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ヨコナデ 〃 (不鮮な二段状ナデ)	(　〃　)
51	〃	〃（〃）	8.2	1.0	—	淡黄橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒とも一定的量。海綿骨片多く含む。	ヨコナデ 〃 (口唇端部面取)	(　〃　)
52	〃	白磁(碗)	17.2	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のない黄味を帯びた白色。	良	やや気泡を含み、僅かにザックリとした感がある。		釉は薄く均一で、内外面とも貫入は細かく密。
53	〃	〃（〃）	—	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のない淡いオリーブ灰色。	〃	緻密		〃 (52と同体？)
54	〃	〃（〃）	—	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のない緑っぽい白色。	堅緻	やや気泡を含むが緻密感がある。		釉は薄く施され、貫入はない。

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（4）

No.	出土地点	種　別	法量(cm) 口径	器高	底径	色　調 (内)(外)	焼成	胎　土	調　整 (内)(外)	備　考
55	A3区　1号土杭	白磁(碗)	推定 (16.5)	—	—	素地は灰白色。釉は明オリーブ灰色。	良	緻密		二次的被加熱を受けている？
56	〃	〃 (Ⅲ)	—	—	—	素地はにぶい黄橙色。釉はやや透明感に欠ける黄味を帯びた白色。	〃	〃		釉は薄く均一。貫入はない。
57	〃	〃 (Ⅲ)?	—	—	—	素地は灰白色。釉はやや透明感に欠けるオリーブ灰色。	〃	〃		釉は薄く均一。(見込に円圏?)
58	〃	青磁(碗)	—	—	5.2	素地は明緑灰色。釉は透明感に欠ける明緑灰色。	〃	〃	(内面の円圏径6.2cm)	釉はやや厚い。
59	〃	土錘	最大長 7.1	最大幅 3.2	孔径 1.3	淡黄色	やや甘い	白色粒・半透明粒・雲母・海綿骨片とも多。赤色粒なし。		
60	〃	〃	〃 3.9	〃 0.75	〃 0.3	明黄褐色	〃	白色粒・半透明粒・海綿骨片とも少し含む。		重さ1.91 g
61	〃	〃	〃 3.8	〃 0.9	〃 0.3	明黄褐色	〃	〃		
62	〃	〃	〃 3.55	〃 0.8	〃 0.3	にぶい橙色	〃	〃		
63	〃	鉄製品	現状長 11.1	現状幅 2.3	現状厚 2.0					刀子状にみえるも錆塊覆って不明。
64	〃	〃	〃 8.55	〃 2.95	〃 2.5					錆塊覆って不明。
65	A3区北端、A4区南端(土師集中出土地点)	土師(碗)	—	—	5.5	にぶい橙色 〃	やや甘い	白色粒、半透明粒とも一定量。海綿骨片・雲母とも少量含む。	ロクロナデ 〃 (底面糸切痕ままま)	ロクロ右回り回転
66	〃	〃 (Ⅲ)	9.4	2.1	5.4	灰褐色 〃	〃	白色粒、半透明粒・雲母・海綿骨片とも多く含む。	ロクロナデ 〃 (〃)	〃
67	〃	〃 (〃)	9.2	2.2	4.6	にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒多。雲母・赤色粒一定量。海綿骨片少量含む。	ロクロナデ 〃 (〃)	〃
68	〃	〃 (〃)	8.8	2.3	4.3	にぶい褐色 〃	〃	白色粒、半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ロクロナデ 〃 (〃)	ロクロ左側り回転
69	〃	〃 (〃)	9.9	3.6	4.4	にぶい橙色 〃	〃	雲母・赤色粒一定量。海綿骨片多い。	ロクロナデ 〃 (〃)	〃
70	〃	〃 (大Ⅲ)	14.4	3.5		にぶい橙色 〃	〃	白色粒・半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ヨコナデ 上半は二段のヨコナデ	体下半は指頭圧＋ナデ加。(非ロクロ種)
71	〃	〃 (〃)	14.5	3.4		橙　色 〃	〃	〃	〃	〃
72	〃	〃 (〃)	13.7	2.7		〃 〃	〃	〃	〃	〃

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（5）

No.	出土地点	種　別	法量(cm)			色　調 (内)(外)	焼成	胎　土	調　整 (内)(外)	備　考
			口径	器高	底径					
73	A3区北端、A4区南端(土師集中出土地点)	土師(大Ⅲ)	13.4	2.4		橙　色 〃	やや甘い	白色粒・半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ヨコナデ 上半は二段の ヨコナデ	体下半は指頭圧+ナデ加。 (非ロクロ種)
74	〃	〃 (Ⅲ)	9.2	2.2		にぶい橙色 〃	〃	〃	〃	〃
75	〃	〃 (〃)	8.5	2.1		〃 〃	〃	〃	ヨコナデ 指おさえ後の ナデのみ。	粘土紐のめくれなど、作風異質。 (非ロクロ種)
76	〃	〃 (〃)	9.2	1.9		橙　色 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半は二段の ヨコナデ	体下半は指おさえ+ナデ加。 (　〃　)
77	〃	〃 (〃)	9.0	1.6		淡黄橙色 〃	〃	〃	〃	〃
78	〃	〃 (〃)	8.7	1.7		橙　色 〃	〃	〃	摩耗により 調整不詳 (上記に同？)	〃
79	〃	〃 (〃)	9.7	1.7		にぶい橙色 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半に不鮮明な 二段のヨコナデ	(　〃　)
80	〃	〃 (〃)	8.7	1.9		橙　色 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半に二段の ヨコナデ	(　〃　)
81	〃	〃 (〃)	9.0	2.1		橙　色 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半に二段の ナデ	(非ロクロ種)
82	〃	〃 (〃)	8.7	1.8		〃 〃	〃	〃	ヨコナデ (上半二段様のナデではあるが、途中一段に吸収)	(　〃　)
83	〃	〃 (〃)	8.9	1.8		にぶい橙色 〃	〃	〃	〃	(　〃　)
84	〃	〃 (〃)	8.6	2.2		〃 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半は二段のナデ	(　〃　)
85	〃	〃 (〃)	8.6	1.8		〃 〃	〃	〃	〃	(　〃　)
86	〃	〃 (〃)	8.5	1.9		〃 〃	〃	〃	〃	(　〃　)
87	〃	〃 (〃)	8.1	2.1		橙　色 にぶい橙色	〃	〃	ヨコナデ (上半二段様のナデではあるが、途中から一段的に吸収)	〃
88	〃	〃 (〃)	8.5	1.8		橙　色 にぶい橙色	〃	〃	ヨコナデ (上半不鮮な 二段的ナデ)	〃
89	〃	〃 (〃)	9.1	2.2		〃 〃	〃	〃	〃	〃
90	〃	〃 (〃)	9.1	1.5		〃 〃	〃	〃	ヨコナデ 上半一段 ヨコナデ	〃

矢駄アカメ遺跡出土遺物観察表（6）

No.	出土地点	種　別	法量(cm) 口径	器高	底径	色　調 (内)(外)	焼成	胎　土	調　整 (内)(外)	備　考
91	A3区北端、A4区南端（土師集中出土地点）	土師(Ⅲ)	9.2	1.7		橙　色 にぶい橙色	やや甘い	白色粒・半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ヨコナデ （上半ナデ＝一段的）	（非ロクロ種）
92	〃	〃（〃）	9.7	1.9		橙　色 〃	〃	〃	ヨコナデ （上段ナデ＝一段的）	（　〃　）
93	〃	白磁(碗)	22.5	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のある明オリーブ灰色。	良	やや気泡を含むが緻密感あり。		釉はやや厚く施されていて僅かに気泡含むが貫入ない。
94	〃	〃（〃）	—	—	—	素地は乳白色。釉は透明感のあるオリーブ味を帯びた白色。	〃	緻密		釉は均一に施されて貫入はない。
95	〃	〃（Ⅲ）	12.5	—	—	素地は灰白色。釉は透明感・光沢がある黄味を帯びた白色。	〃	〃		釉は薄く均一に施されて、内外面とも貫入は細かく密。
96	〃	〃（〃）	(13.2)	—	—	素地は浅黄色。釉は透明感と光沢のある黄味を帯びた白色。	〃	〃		釉は薄く均一で、貫入は細かく密。
97	〃	珠洲(鉢)	(25.0)	—	—	灰白色 暗灰色	並	白色粒・半透明粒少量、黒色粒多く含。		胎中に少量の気泡含み僅かにザックリ感がある。
98	A3区　包含層	匙形土製品	現存全長 (5.75)	最大幅 3.35	最大厚 2.45	淡褐色	〃	白色粒・半透明粒少し。海綿骨片多。雲母粒一定量。	手づくね （指圧痕＋ナデ）	匙形頸基部に紐通し穴様の穿孔痕あり。
99	〃	コップ形土製品			底径 5.0	褐灰色	〃	白色粒・半透明粒・海綿骨片とも多。	〃 （　〃　）	
100	〃	土器（高杯？）				橙　色	〃	白色粒・半透明粒とも少し。海綿骨片多。雲母粒極少。	ナデ ミガキ	
101	A3～4区　包含層	土師(Ⅲ)	8.8	2.0		にぶい黄橙色	やや甘い	白色粒・半透明粒とも極少。雲母粒多。海綿骨片・赤色粒一定量。	ヨコナデ 上半一部二段ナデ （下段不全周）	外体下半指押さえ＋板目痕。（非ロクロ種）
102	〃	〃（〃）	8.0	1.8		〃	〃	〃	ヨコナデ 上半ヨコナデ	外体下部～底面は指押さえ＋板目痕。（非ロクロ種）
103	A1区　包含層	青磁(碗)	—	—	—	素地は淡灰色。釉はやや透明感のあるオリーブ灰色。	良	緻密		釉は薄く均一。内面に密な貫入。円圏径約6.2cm。
104	A1区	砥石	現存長 10.8	最大幅 5.3	最大厚 2.2					長軸両端欠陥。四面とも使用。

補遺　「出土遺物」の項に関し、その形態的変化や年代比定および研究成果等々、注により拠るところを明らかにしてこなかったが以下の文献をたよりとした。

田嶋明人　1986　「考察漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
四柳嘉章　1987　「中世土師器の編年」『西川島能登における中世村落の発掘調査』　石川県穴水町教育委員会
藤田邦雄　1989　「中世土師器素描」『北陸の考古学Ⅱ』　石川考古学研究会
鋤柄俊夫　1994　「第２章平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器研究』　財團法人古代學協会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
出越茂和　1997　「北陸古代後半における椀Ⅲ食器（後）」『北陸古代土器研究第７号』　北陸古代土器研究会
田嶋明人　1997　「［5］北陸」『国立歴史民俗博物館研究報告71中世食文化の基礎的研究』

第6章　ま　と　め

矢駄アカメ遺跡は縄文時代から中世の時期幅を確認したが、主体をなすのは縄文時代晩期と平安時代末の2時期で、その間の時期は若干の土器の出土は認めるものの、明確に遺構に付くものは特定できなかった。出土遺物は縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品（土錘）・鉄製品である。

縄文時代では地山面において、縄文時代早期末から前期中頃の縄文土器小破片の出土をみた土坑が確認された。小破片ながら土器を伴うものは4基であったが、その形態と遺構覆土の同一的様相から、2～11号までの10基を当該時期のものとして認識した。

検出された土坑はその形態から大きくⅠ．平面形態が長方形ないし長円形を呈し、壁の立ち上がりは垂直気味で、深さ0.4～0.7ｍ程度、底面がほぼ平坦をなし中央部に径0.2ｍ程度のピットを伴うもの、Ⅱ．Ⅰの底面中央部のピットを伴わないもの、Ⅲ．平面形態が不整形な円形を呈し、壁の立ち上がりは大きく外に開き傾斜角の弱いもので、底面もはっきりと把握されないもの、の3分類される。

Ⅰ類には2～5号土坑、Ⅱ類には6号土坑、Ⅲ類には7～11号土坑が該当する。

特にⅠ・Ⅱ類の平面形態については、A．長方形、B．長円形、C．隅丸長方形と細分が可能で、ⅠA類＝2・5号土坑、ⅠB類＝3・4号土坑、ⅡC類＝6号土坑が対応する。法量に関しては、底面積規模からみると0.328㎡～1.161㎡間が認められ、やや大きさには幅をもつ。

次に検出地点におけるグルーピングでは、ア．南域の2・3・4・5号土坑（＋8～11号土坑）とイ．北域の6号土坑（＋7号土坑）に二分されると思われる。また、平面形態が方形における長軸と丘陵尾根筋との関係は、尾根筋に平行するもの2基（5・6号土坑）、同直交するもの3基（2・3・4号土坑）が確認される。

また、縄文時代から弥生時代の土坑を考察された三浦純夫氏[1]は、縄文時代の土坑は1．丘陵上に存在し、多くは群在する点、2．土坑群と集落が接した検出例がない点、3．出土遺物は小破片の出土のみで、中には出土遺物を伴わないものも認められ、縄文早期～中期の事例が多い点、4．土坑群は形態的には幾つかの変化をみせるが、機能的には同一と考えられる点、等を指摘している。

本遺跡の検出事例と対比すると、1の立地に関しては、丘陵の舌状台地先端部に位置することから条件に合致はするが、2の集落についてはこの台地においては現在のところ未確認であるが、隣接することなしに周辺に存在することは確実と思われる。また、北方約0.5Kmの丘陵上には矢駄瀬戸山遺跡が存在する。3の出土遺物では、細破片での出土で、図化に堪えるものではなかったことと、遺物を伴わない土坑の存在、時期が前期中頃を下限とする点において共通する。4の機能に関しては、いわゆる落とし穴、貯蔵穴等挙げられるであろうが、確実な根拠を示すことができないため不明とせざるを得ない。また、三浦氏はその機能を考える上で、遺構覆土の土壌分析を提唱しており、調査時点において実施しなかった点は反省させられる。尚、本遺跡の南方約1.5Kmの丘陵上には縄文時代の土坑11基・古墳時代の土坑6基を検出した中村畑遺跡[2]が位置する。

平安時代末では、検出された遺構としては、総柱による掘立柱建物4棟、土坑1基（1号土坑）、土師器皿を集中出土した落ち込みないし溝状遺構（土師器集中出土地点）で、出土遺物は特に1号土坑及び土師器集中出土地点から土師器皿を定量出土した他、珠洲焼、白磁・青磁にみられる陶磁器などが確認された。

特に定量出土した土師器皿について言えば、従来の在地系統から新たに流入した外来（京都）系統の出現期と捉えられるものが認められ、その過程を追える貴重な資料を得ることができた。

まず、従来の在来系ロクロ土師器皿群に新たに外来系＝京都系非ロクロ土師器皿の初現的採用段階とされる第一段階、ロクロ種では大法量が消失し、小法量においては器形変化・器種減退化を進める一方、非ロクロ種では調整の粗略化と器形変化がみられるなど、次への過渡的段階される第二段階、ロクロ種が消失し、非ロクロ種にほぼ全面的に転換・移行した段階とされる第三段階の大きく三つの変遷が捉えられた。

時期的には京都系土師器皿の出現期あたる第一段階は、平安京左京四条一坊ＳＥ８堀方出土資料に対応する可能性が高いと思われることから11世紀末頃に、非ロクロ種に転換・移行した第三段階には、それに対応する珠洲焼鉢により珠洲編年Ⅰ期（吉岡編年）の範疇と考え12世紀後半代と推測される。また、第一から三への過渡期とされる第二段階については、第一から三の範囲のなかで捉えておきたい。

また、京都系土師器皿の特徴される「口縁部の調整がいわゆる二段ナデ技法[3]」によるものに関して、藤田邦雄氏が検討[4]を加えられているのでここで取り上げておきたい。

土師器における器種構成・法量分布（第18図[5]）では比較的一括的様相を呈すと思われる土師器集中出土地点では、28点中ロクロ種が５点（碗１・皿４）非ロクロ種が23点（皿23内二段ナデ19）存在し、皿の平均法量は口径14.0cm・器高2.93cmと口径8.95cm・器高1.89cmの大小二法量認められた。1号土坑では、29点中ロクロ種19点（碗14・皿５）、非ロクロ種10点（皿10内二段ナデ10）存在し、皿の平均法量はロクロ種では口径19.2～12.9cm・器高５～3.2cm台とばらつきがみられるものと、非ロクロ種の口径15.2cm・器高（復元）2.68cmの大法量と、口径8.41・器高1.85cmの小法量が認められる。

具体的な藤田氏の検討は、この比較的一括的様相を呈すと思われる土師器集中出土地点の東側地点出土土器を対象とし、基準資料となる左京内膳町出土土器[6]と対比を行い、11世紀中・後半にあたるＳＤ41Ａと11世紀末にあたるＳＥ288下層土器との形態・法量分布の相違から11世紀末頃を妥当とする見解を示している。この結果北陸[7]では能登・越中において早く受容するなかにおいても、本遺跡出土土器は現在のところ最も古相を呈するものとして位置付けをおこなっている。

この藤田氏の検討により得られた年代観と前述（第５章　出土遺物　中島）のものとは基本的に相違は認められないと思われる。

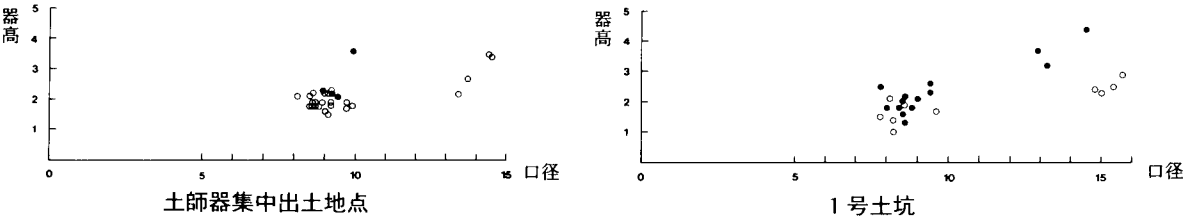
以上の評価と、遺構の切り合い・覆土の対応関係、出土遺物の時期からみる遺構の展開としては、Ⅰ．土師皿集中出土地区にみられる溝ないし落ち込み状遺構、Ⅱ．切り合いを伴う２時期の掘立柱建物＋土坑の段階が想定される。また、Ⅱ段階については、その切り合いにより、Ⅱ－1．桁行３間規模の総柱建物3号掘立柱建物＋桁行４間規模の総柱建物1号掘立柱建物、Ⅱ－2．桁行３間規模の総柱建物４号掘立柱建物＋桁行４間規模の総柱建物２号掘立柱建物＋１号土坑と分けて考えることが可能と思われる。

時期的にはⅠ段階は遺物第一段階に対応し11世紀末に、Ⅱ段階は遺物第三段階に至る間の12世紀中～後半代までと考えられる。Ⅱ段階の内のⅡ－１期は遺物第一段階に近い時期[8]、Ⅱ－２期は２号掘立柱建物柱穴Ｐ８と１号土坑出土遺物より遺物第三段階に至る時期とする可能性が高いと思われる。

また、京都系土師器の技術流入に関して、第１章でも述べたように、当地は平安時代末期12世紀前半には京都賀茂別雷神社（上加茂社）領の土田（加茂）荘に編入されていたことから考えると、その流入が比較的早期であったことの裏付にもなると思われる。また、同様に出土している富山県高岡市国府関連遺跡が古代における国庁推定地とされる点や、中島町オカ遺跡が中世「熊木院」を支えた在地領主層との関わりを重視している点からすると共に要諦的様相を呈するものと思われ、本遺跡もそれを色濃く反映しているものと推察される。仮定となるが、本遺跡は土田荘と深く関わりつつ、荘園

経営の一役を担い得るであろう集落であった可能性も想定される。

尚、最後になりましたが本報告書作成にあたり、出土品整理時に、滝川重徳氏に多大な援助・協力を得たこと及び、第６章の執筆に際し、藤田邦雄・浜崎悟司の各氏には御教示・御指導を頂いたことに深く感謝申上げます。



第18図　土師器皿法量相関図（黒丸＝ロクロ種・白丸＝非ロクロ種）

注

(1) 三浦純夫　1988 「第６章考察　第２節大型土坑の機能について－能登半島の弥生時代を中心として－」『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

(2) 谷内尾晋司他　1982 『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　志賀町中村畑遺跡・志賀町女郎塚遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

(3) この口縁部二段ナデ技法は、伊野近富氏によるとＡａタイプ．生産地は深草を中心とする基本的に手づくね技法により、色調は褐色系を呈し、口縁部は二段ナデが基本で端部は外反するもので，10世紀中葉～12世紀初めの段階に認められるタイプ、Ａｂタイプ.端部が強いヨコナデを受け、直立気味となる12世紀前葉～中葉の段階で認められるタイプ、Ｊａタイプ．端部が面取りの直前で、つまみ上げるために上方に突出するタイプで12世紀後葉に認められるものがある。これに照合すると比較的一括性の認められる土師器集中出土区東側地点出土土器のものはａ類の様相を示すものと思われる。(伊野近富　1997 「製作技術から見た京都系土師器皿の伝播と受容」『第16回中世土器研究会報告資料』 中世土器研究会)

(4) 藤田氏は第16回中世土器研究会のテーマ「京都系土師器皿の伝播と受容－平安後期を中心に－」において中世の北陸の状況を発表された際、本遺跡出土資料を対象として扱った。藤田邦雄　1997 「中世北陸の京都系土師器皿－その受容と展開－」『第16回中世土器研究会報告資料』 中世土器研究会

(5) 藤田邦雄氏作成によるものに一部加筆。

(6) 伊野近富他　1980 「平安京左京跡（内膳町）」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会

(7) 北陸で京都系土師器が普遍的になっていくのは、12世紀中～後半で、その中においても能登と越中は他地域より早く確認されている。北陸では富山県高岡市越中国府関連遺跡SK02（高岡市教育委員会　1994 『越中国府関連遺跡調査概報』Ⅵ）で確認しており、12世紀初頭に位置付けられている。石川県内では中島町オカ遺跡（中島町教育委員会　1992 『オカ・ノギヤチ遺跡』）が12世紀前～中葉・富来町貝田遺跡（石川県立埋蔵文化財センター　1995 『富来町貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡』が12世紀中葉から後半に比定されている。

(8) 但し、ⅠとⅡ－１においては遺構の切り合いは認められなかったため、前後（集中出土地点を４号掘立柱建物の廃棄によるもの）する可能性を否めないが、４号掘立柱建物の柱穴Ｐ20・48において若干新相の遺物が出土しているのでやや後出と判断した。また、集中出土地点近辺では掘立柱建物の柱穴になり得るピットもみられるので(調査区が限定のため推定復元が至難)、あるいはそれ以前の建物に伴う廃棄土坑などの可能性も考えられる。

参考文献

・藤田邦雄　1992 「加賀における様相－土師器－」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

矢駄アカメ遺跡近景（北方より）

上部層の掘削排土（北方より）

図版2

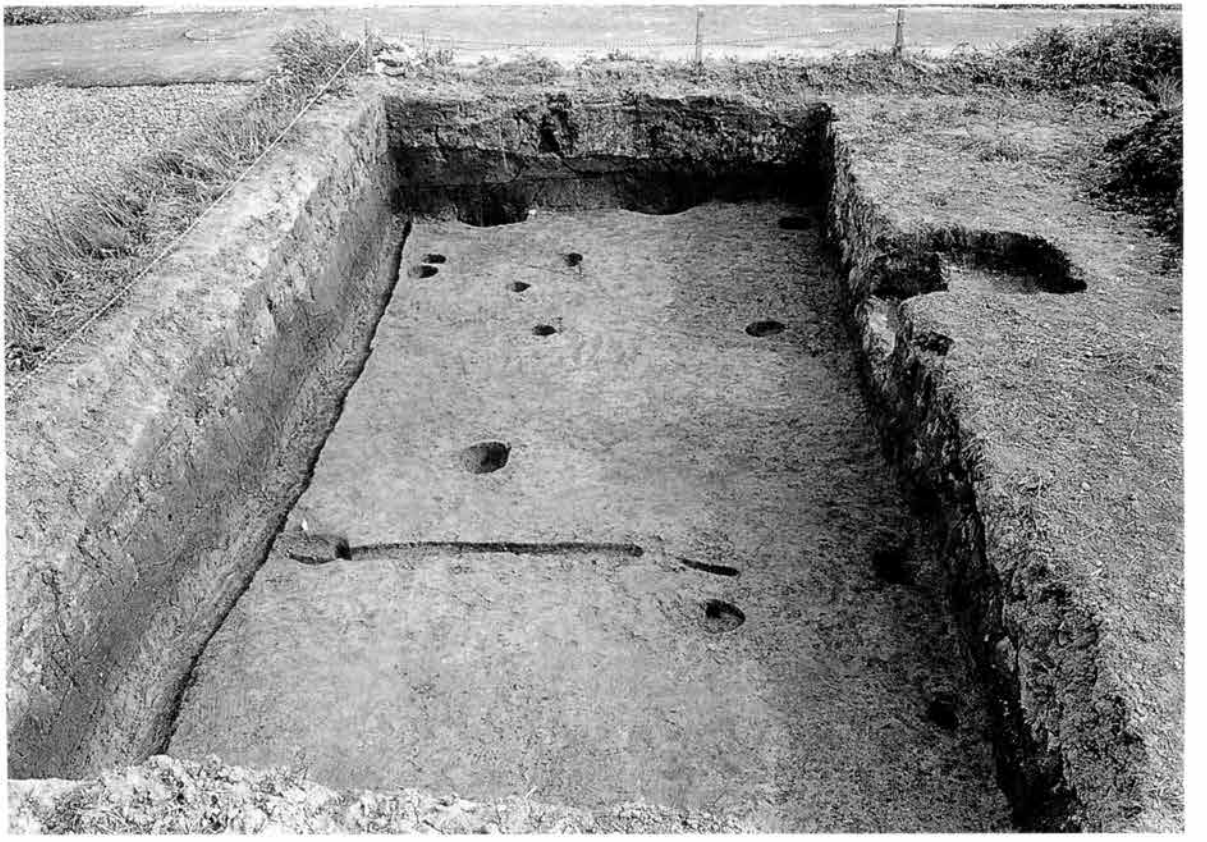
Bトレンチ(区)掘削排土（東方より）

Aトレンチ(区)遺構の発掘作業風景（北方より）

Aトレンチ(区)調査風景（北方より）

Aトレンチ完掘風景（北方より）

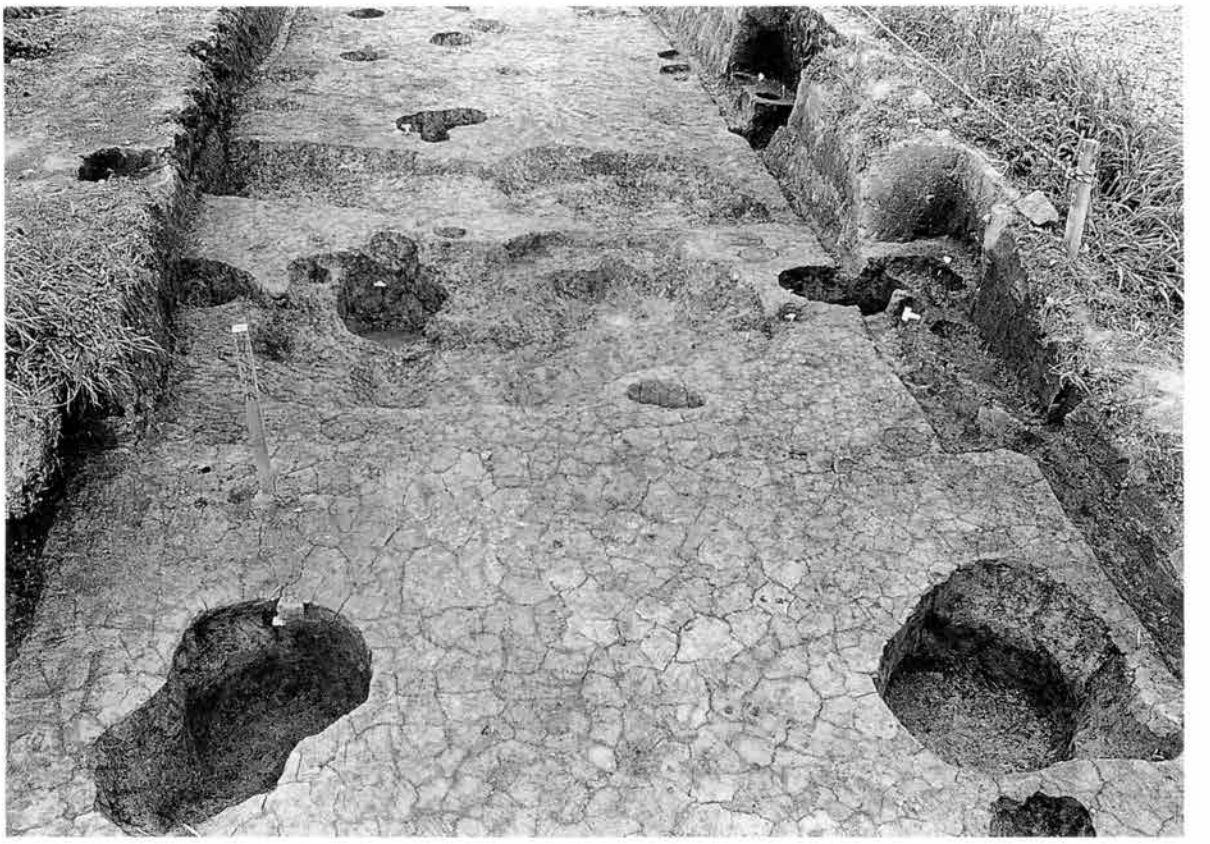
Aトレンチ(区)北端（道路を挟んだ上部がC区）



Cトレンチ(区)完掘状況（北方より）

Aトレンチ(区)土師器集中出土地点（南方より）

同上（西方より）

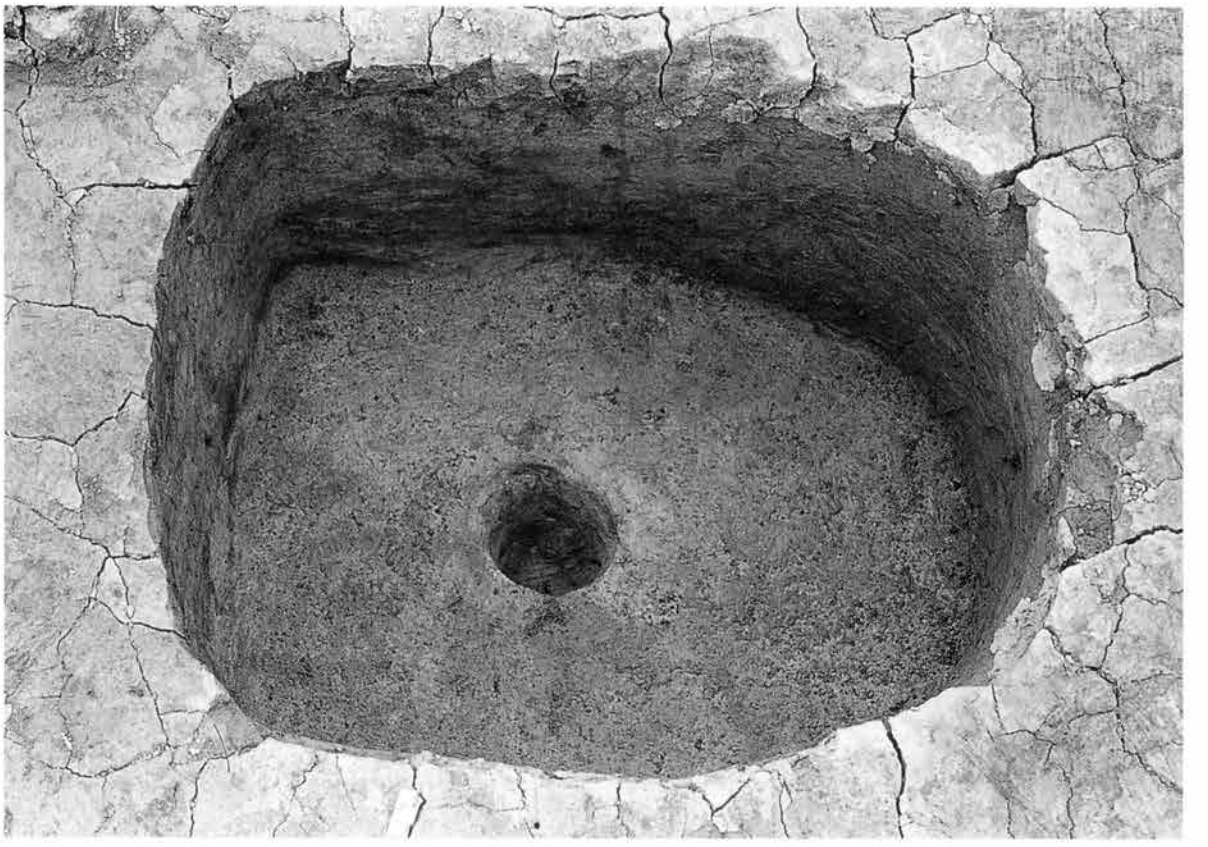


Aトレンチ(区)掘立柱建物跡（南方より）

Aトレンチ(区)1号土坑と1号溝跡（西方より）

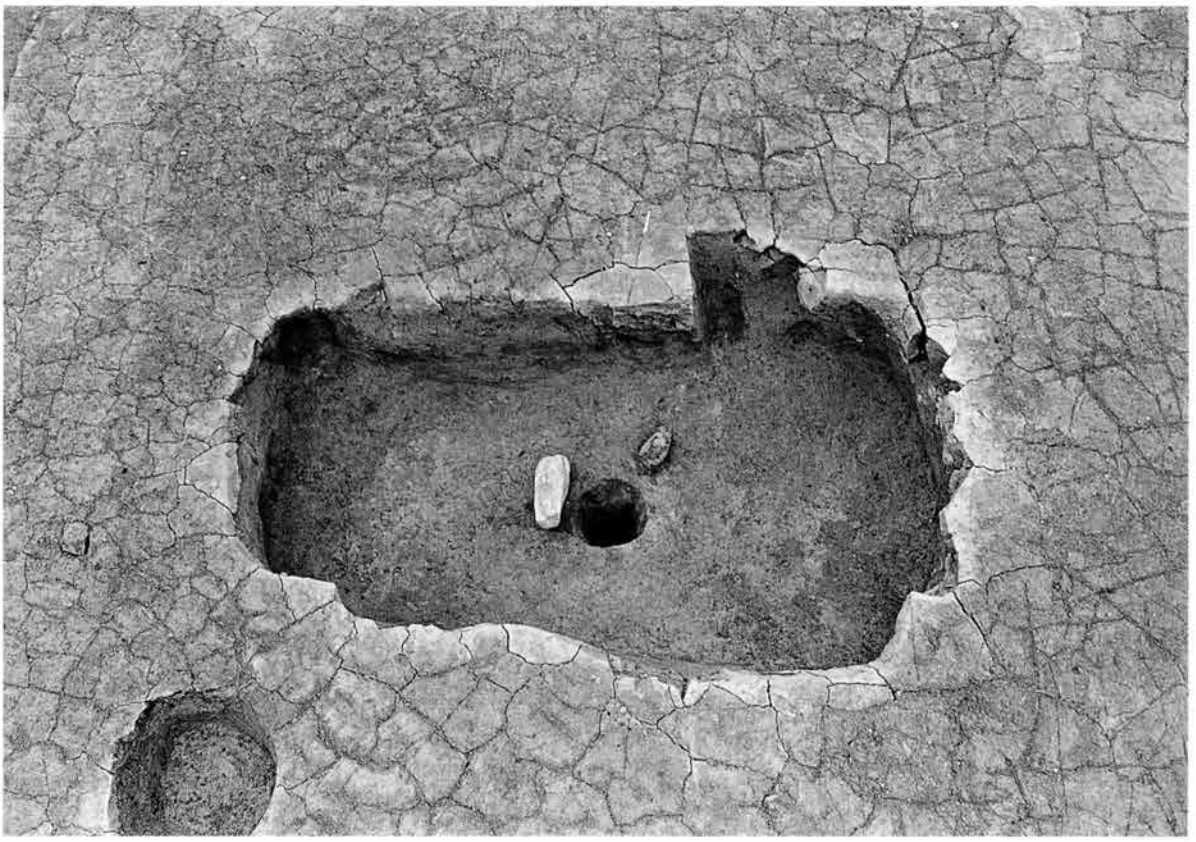
Aトレンチ(区)2号土坑（西方より）

同上　土層の状況（北方より）

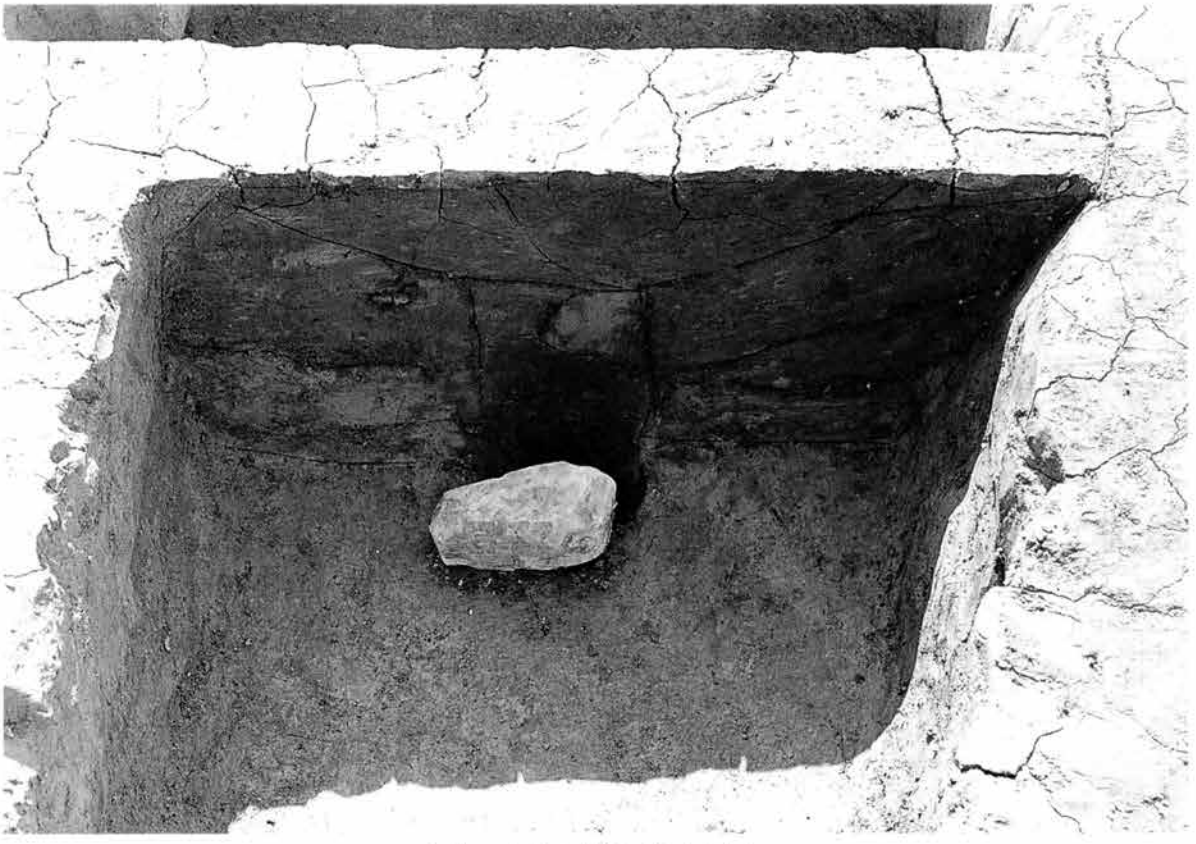


Aトレンチ(区)4号土坑（西方より）

Aトレンチ(区)3号土坑（西方より）



Aトレンチ(区)5号土坑（西方より）

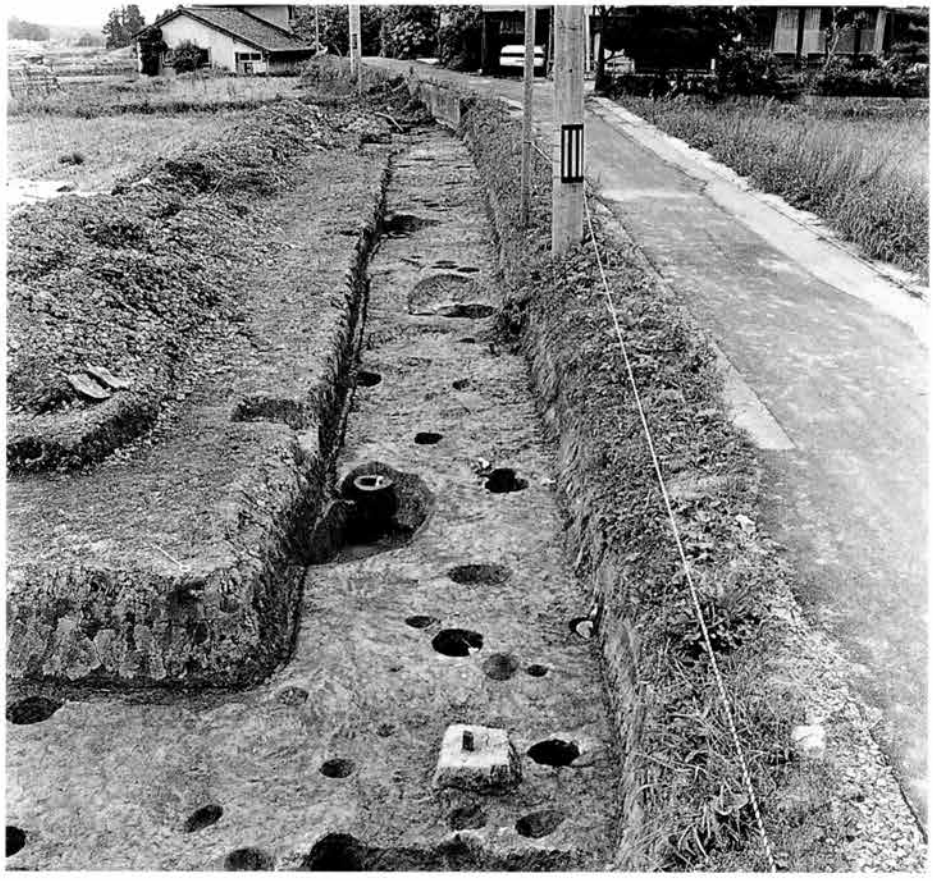


同上　土層の状況（北方より）

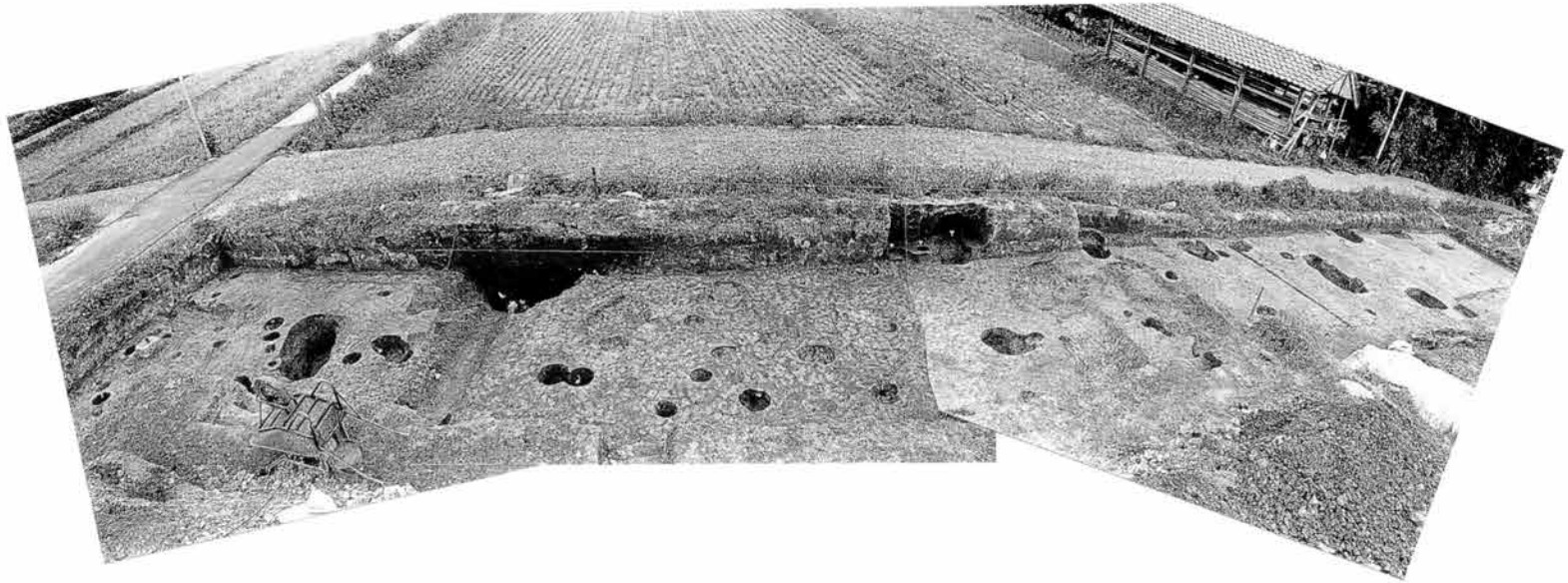
Bトレンチ(区)7号土坑（北方より）

Aトレンチ(区)6号土坑（東方より）

Bトレンチ(区)
完掘状況
(東方より)



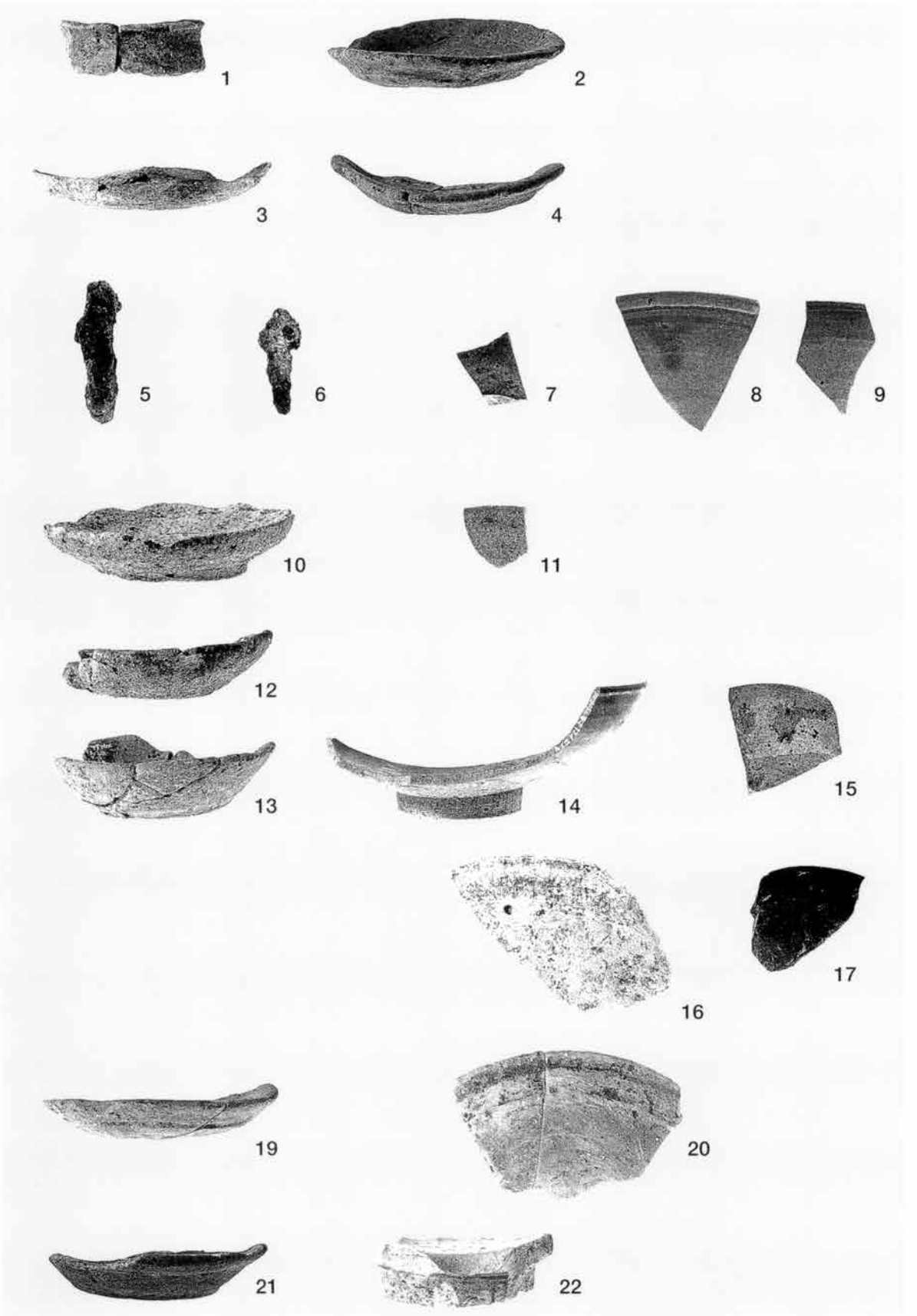
同上(北方より)



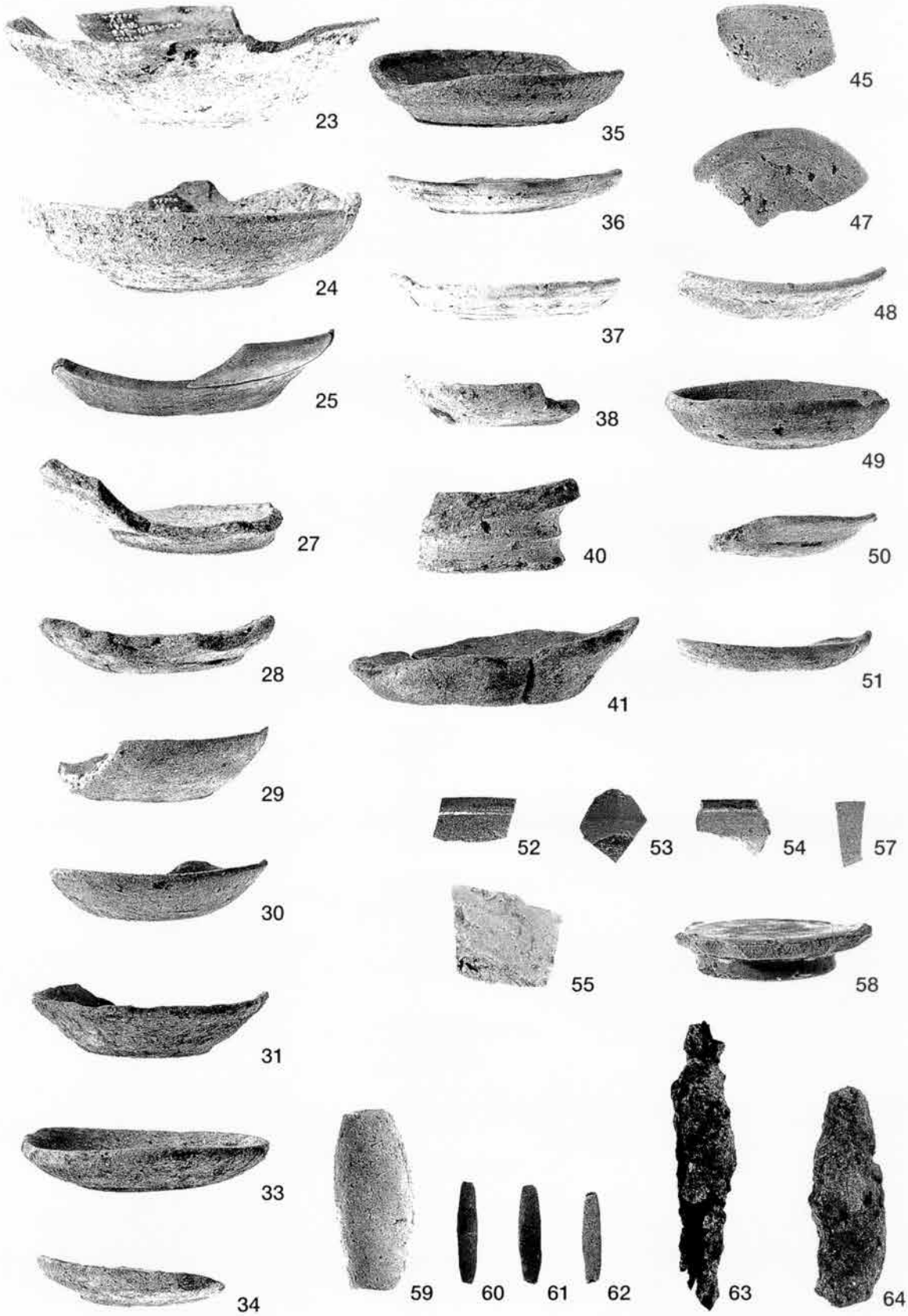
矢駄アカメ遺跡Aトレンチ全景（西より）とその他の出土遺物

矢駄イケダ遺跡近景（遺跡は左の高台？）

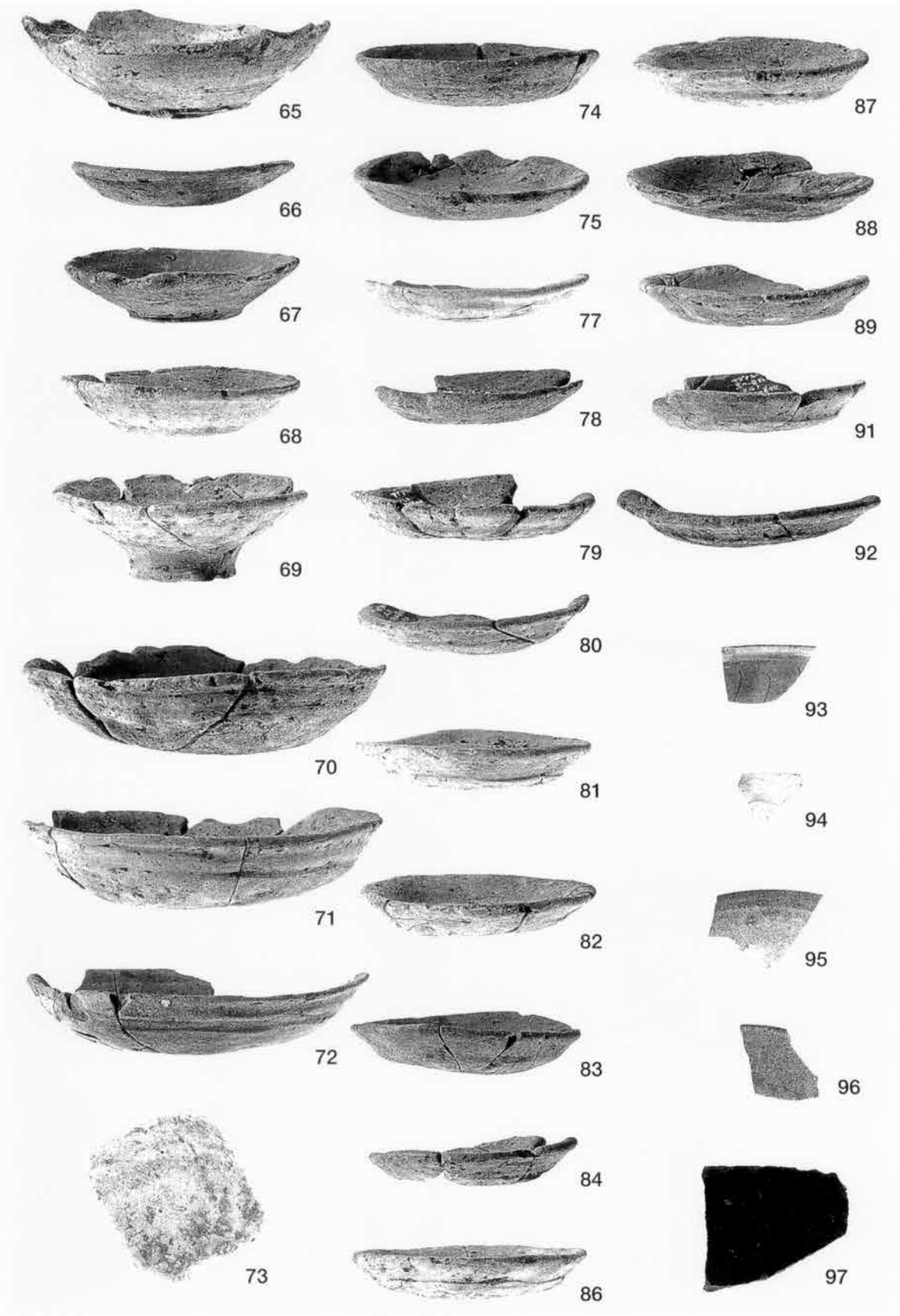
同上　確認調査作業掘削



矢駄アカメ遺跡出土遺物（番号は実測図番号に同じ）



矢駄アカメ遺跡出土遺物（1号土坑）



矢駄アカメ遺跡出土遺物（集中出土地点）

矢駄アカメ・イケダ遺跡発掘調査報告書

－県営ほ場整備事業矢駄地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　平成10年３月27日

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921-8044 金沢市米泉４丁目133番地
TEL (076) 243-7692

印　　刷　株式会社 ハクイ印刷
〒925-0053 羽咋市南中央町ユ83-51